

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十四年九月二十五日 印刷
昭和四十四年十月一日発行 (毎月一日発行)
(第四十九号)



No. 49

44年度・二賞発表
十月号

川柳塔社主催
44年度・二賞発表句会

兼題
柳話
「幸運」 中島生々庵
「ラッシュ」 本田恵二朗選
「虫」 若本多久志選
「宿命」 清水白柳選
北川春巢選

会費 二百円

(席題二題の予定)

会場 以和貴荘(阿倍野区松崎町二丁目)

電話 622・1275番

大阪駅からは環状線天王寺駅下車(地下鉄も可)



アベノ・上六
近鉄
アベノ 621-1231
上六 771-3331

路郎賞・川柳塔賞発表と同人総会!

昭和四十四年十月十二日(日)開催

★ 同人総会は午後3時から―二賞発表句会は五時半から―

会場 アベノ 以和貴荘階上和室大広間

★11月の兼題「食通」「ハブニング」「裏つけ」「替え歌」

★ 同会場で宿泊が出来ます、予約至急。

アイデアと技術で躍進する

シャープ

早川電機

何気ない無駄足で押しの手巧みなる

武者修業お得意さんを酔いつぶし

お召替えあなたの移り香たたみ込み

寿命が伸びたとかで人生もてあまし

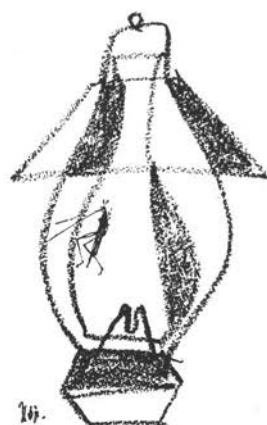
盆栽のようにしつけがひんまがり

中島生々庵

今月のことば

私は酷寒猛暑だけ避けた毎朝浜寺公園遊歩道を一時間歩く。老人には快適な舗装路と並んで広い芝生や松原が続く海岸なので学生達にも静かな練習場でもある。登校前の時間を割いて単独或は二、三人組んで走る幾組がある。女性には稀れで男子が多い。その走行の間を縫うように私の老人の冷水が潤歩するのである。学生諸子の大半は運動シャツが薄汚れて汗臭さに顔をそむけたくなるのもあり、心臓の音が聞こえそうな程真剣である。或朝、陽やけたらしい筋肉の一青年が私に異常な

印象を与えた。それは青年がすれ違った後にも言われぬ快い匂いを残して行ったからである。昔の武士が嗜みとして香を焚きしめた話を思い出す。先月或化粧品屋さんの対話記事で「追風用意」という言葉が平安時代にあった事を知った。広辞苑によると追風とは着物の香を伝えてくる風とある。このガサガサした世の中で私にとって欠かせぬ楽しい朝朝の出会いである。好青年の健在を心から祈っている。



16.

川柳塔十月号

川柳塔十月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵……………(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

読書の秋に寄せて……………金井文秋……………(2)

川柳日記……………麻生葭乃……………(19)

川傍柳初篇研究……………(七十六)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清
川端柳風・故高須亜三味・丸
博美・藤井和雄
十府・岡田甫

川柳徳川記……………(八)……………富士野鞍馬……………(41)

秀句鑑賞……………清水白柳……………(42)

ぬかずけば……………高鷺亜鈍……………(19)

お月様と兎……………(大陸巷談)……………東野大八……………(44)

私論・柳論

読書の秋に

寄せて

十月と云えば秋のさ中、灯火親しむの候とか、読書の秋とか、長い間われわれの心の中に浸みこんでいる言葉だが、此頃になって大分様子が違ってきた。

読書に親しむどころか、食事をしながらニュースを聞き、寝転びながらドラマを楽しむと云った具合に、読む努力をだんだん怠たるようになって来ている。

仕事から疲れて帰り、夕食をとってただ寝るだけならそれでもいいだろうが、文芸に親しむ者がそれでは困る。少しの時間を利用しての読書は秋だけに限った事ではなく、夏も冬も同様で、そうしなければ時代から置き去られてしまうだろう。

人間が初めて動力で空を飛んでから六十数年で、遂に月に足を踏

44 年度・二賞発表表

中島生々庵・北川春巢・若本多久志・川村好郎・西尾 葉・菊沢小松園
清水白柳・市場没食子・正本水客・戸田古方・橘高薫風

安芸路を行く……………高杉 鬼遊……………(58)

水車氏の好読物……………福浦 勝春……………(51)

近作柳樽……………菊沢小松園選……………(32)

初步教室……………本田恵二朗……………(48)

大萬川柳「鮒」……………清水白柳選……………(50)

★柳 界 展 望……………(薫風)……………(52)

★本社九月句会……………(庸佑)……………(54)

★各地柳壇……………(文秋)……………(59)

「チャンス」……………木山 遠二選……………(46)

一路集「本宅」……………西辻竹青選……………(46)

「歌手」……………山内静水選……………(47)

★編集集後記……………(一三夫)……………(65)

み入れるまでになった。大変な科学の進歩である。

それに伴って日常生活も急速に変わりつつある。十年一昔と云ったのは大昔の事、現在は一年一昔と云っても決して云い過ぎではない。特にアイディアの世界では一日一日が勝負で、常に新しいものを考えて行かねばならない。

川柳を初め文学の世界でも同じ事で、キャリヤがいくらあるからと云っても読む事を忘れてしまつてはオリジナルな作品が生れてくるはずがない。

句会へ来て見ても新人がベテランをぐんぐん抜いて行くのを見ると、キャリヤを頼って勉強しないんだなと感じるのは私だけではないだろう。

暑い間は夏バテでと云つても通るが、ころよい季節ともなれば大いに反省して、勉強するべきではないだろうか。読書の秋がいつまでも生きた言葉であるように。

(金井文秋)



中島生々庵選

大阪市 正本水客

能面のかげりの動き眼に残る
霧の海人恋う色になつてくる
真昼の湖 水の顔が浮く

月から

月に人ふたり夢が実つて夢くずる
月面荒涼ナイロンの国旗はためかず

大阪市 木村水洞

月へ行く時代なれども神詣で
長屋に飼われて犬も達者なり
朝顔に今日の勤めをはげまされ
晩婚をこの頃悔るほど弱り
妻の肩叱られながらたたかさ

弘前市 工藤甲吉

人類の智恵月からのシャレをきき
ぶら下げてもらつて西瓜いい気嫌
旱天の慈雨ありがたくヘソも濡れ
ふるさとの嘆きホテルがいなくなり
そんな大臣もあつたかワッハッハッ

香川県 三井酔夢

長男急に左眼失明す

雑沓のどの眼もみんな美しい

岡山大学外来にて

待つことに馴らされ蟬の声ばかり

岡大眼科入院

手術室扉閉され時止まる

見張り立て便器を使うことも馴れ
赤ん坊になつてスプーンに合わす口

大阪市 西 出 一 栄

高僧もやっぱりミニを盗み見る
熟練工のように下車駅パツと醒め

岡山県 浜田久米雄

カタカナが入るニュースはピンと来ず

好郎氏を迎えて

一日がこんなにながい孫の留守
きりぎりす放してやれと秋の風
体力へ帰途も考慮に行く散歩
梅漬けもひとりで出来る嫁となり
おふくろを乗せたハンドル肩が凝り

鳥取市 藤 本 礎 山

愚痴云えば済まず一年臥たまんま

墨をする硯正座の気を鎮め

臥している不幸忘れる程に病み

早く癒くなれと青空のぞきに來

長廊下義足生き抜く音で過ぎ

倉敷市 本 田 恵 二 朗

若い血が少し残っていた或る日

ヘルメットかおれば教授をオイと呼ぶ

母親も添えて嫁かせたみたいです

八十五才の母かくしゃくとアポロ観る

足跡をつけてお月さんすみません

高槻市 傍 島 静 馬

きかぬ子をうっかり叩いた手が痛む

体操の祖父からわが家明けはじめ

ちよきちよきちよきおやし垣根をトラにする

大阪市 本 多 柳 志

死んだ気でやれとは無理な智恵をつけ

後晴れの予報へ海苔を買いにやり

背水の陣とは女泣くつもり

文案もむつかしい時代やなと思ひ

人類月に立つ

さもあればあれ素足で月はまだ踏めず

大阪市 児 島 与 呂 志

母を思う

孫可愛いかろうに孫は逃げ

母の愚痴聞くのは私だけでよい

我が妻を褒めてくれる母が好き

まだ兄嫁をばやく母健者

子供のようにながれど母

東大阪市

久米奈良子

月面へ人智の限り踏んでみせ

句集掌に療養中のひとと知る

欲情とのみ知る花の嘆き

まむかいに恋の飛沫を浴びて佇つ

古川隆久二才

子になるというて寝顔のあどけなさ

豊中市

戸田古方

やーい科学へブレーキかけてんか

臍さがしデモクラシーのことですが

蒼空になって木槿がまっ白い

リベットになり切ること躊躇する

ひとり子の気促組織に馴染めない

大阪市

橘高薫風

原爆忌鳩ら火傷の脚運ぶ

傷ついた父その日から髭をおく

逢いに来た魚族のように身をしまらせ

恋人の芥子の涙でもいいさ

残暑御見舞鞭打ち症も三月目で

大阪市

不二田一三夫

手内職そんな稼ぎの原稿紙

昭和元禄こんなぼくでもペンで食え

ご自慢の達筆 他人の時間食い

寄席(二句)

孫弟子の稼ぎまくるを見るテレビ

芽が出ずに楽屋の隅で老いていく

神戸市

仲どんたく

秒読みで朝飯を食べ靴を穿き

3Cは息子夫婦に先越され

月に立ち地球が出た出た歌う夢

残暑なお酷しき折を毛皮ショー

大阪市

中川滋雀

盆踊りビルの谷間で輪を狭め

日がたつにつれて空しさだけ残り

臨月のこれ見よがしに歩を運び

無知と云う強さが大きな口もきき

岡山市

川端柳子

平凡をよろこぶ妻の手内職

御参考までに独身披露をし

紙ヒコキ宇宙の夢が折目から

和解した番茶つなぎの音をたて

宇部市

平田実男

ホステスの内緒話は金がいり

食卓を買って食器が古くさい

伯母死去二句

いいところへ行けそう供花でうまる顔
毒舌が聞けぬ淋みしい骨拾う

大阪市

市場没食子

金魚すくいお玉じゃくしも混って
口肥えた孫で土産も気を使い
ビニールハウス生れの西瓜顔を出し
タクシード拒ひされ意地でバスを待ち

大阪市

水谷竹莊

代役を無事につとめて見とめられ
色街に育ち着こなしほめられる
長生きをしてねと久し振り別れ
文化人らしく見せたいベレー帽

守口市

羽原静歩

お見合いは暗夜行路の顔でなし
結論はたった五分のインタビュ
文箱あけると明治の母がいる
学園の騒ぎも知らず蟬時雨

岡山市

大森娛句楽

爪に火を灯もし得た田へ用地杭
筆不精詫びる気はあり無事に生き

松明の炎も亦涼し夏祭り

阿波踊り指す手引く手を下駄が追ひ

倉敷市

藤井春日

医者と手の切れないうちが無事のうち

定退のこれが最後の決裁判

持参金つき天二物を垂れ給い

赴任地のここでも上野介に悩まされ

下関市

国弘半休門

八時間勤めて寄り道しない夫

向き会えばまぶしい瞳下を向き

馬鹿な雀で公害へ住み馴れる

日本に民謡があり浴衣着る

大阪市

西森花村

上を向いて登る毛虫もあわれなり
悲しげに気狂いが見るサイケ調
高度成長利子より先に元が消え
分譲価格浮世離れた気にさせず

竹原市

山内静水

妻の留守末ッ子床をのべてくれ
便利なものにはずしてくれたゴムバンド

心のぞかれまいとする歩を合せ
妻の留守でんでに食べて朝を出る

倉敷市

水粉千翁

聞いている返事ではない化粧中
七色のテープを架けて通り雨
剃り落とす日へ執念のヒゲが伸び
袷を脱いで会長らしく酔い

倉吉市

奥谷弘朗

ささやかな挑戦女房もの言わず
山仕事日陰見つけて昼にする
ブロックで囲う隣りの金廻り
名月やアポロが行ったら変になり

岡山県

直原七面山

天地をつなぐ銀の雨
人の不幸も写してカメラ
何を祈るか孫の柏手
姑に甘えて 嫁利口

出雲市

原独仙

指一本触れず婚約不安がり
突貫工事 中で要領よい人夫
かあさんにぶたれながらもしがみつ
かあさんのミス笑い合う夜の膳

松江市

中川晃男

敗戦記念日また母さんの愚痴話

故郷の駅素通りさせる急な用

城下町とまどいさせてビルラッシュ
白バイをバックミラーに捕えたり

倉敷市

木村千容

月十句とうとうできずじまいなり

アポロ成功

息詰る一瞬足が月につき

ハエ一疋打つにも老婆の手を借りて
角をため牛を殺すの愚はよそう

兵庫縣

遠山可住

隣席の窓から富士さん見えはじめ
出る杭は打たれ出なけりや左遷され
我が家の涼点そこに犬が寝る
冷汗をかいいて巡査と笑い合う

高槻市

福田丁路

み仏と胡座をかいて睨めっこ
荒れ果てた遺跡の丘の月見草
飲めぬ酒強いる悪魔のような顔

天の橋立にて

人波に天の橋立沈みかけ

大阪市

石倉旅風

看板は弟子が書いたか書道塾

暑ければあついで花が赤く咲き
酔うているうちは人生悟り切り
ちよこなんとおん丈ひくき石仏

名古屋市 吉田水車

新築の家を眺めて田植哉
ネクタイも大分ゆるみ退け近し
喰べるようにして出さねば喰べぬ亭主なり

アポロ十一号月着陸をたたえて

かかるとき男としての月を踏み

鳥取県 谷無閑

浮草のやがては向うの岸に咲き
遠心分離機のように呆気なく別れ
本家の家風分家の嫁にあきたらず
踊りの輪帯しめなおし しめなおし

平田市 久家代仕男

冷房が効いて活気の錦魚鉢
一日を疲れひまわり西へ垂れ
訪れを襖細目に覗かれる
仲間親の届かぬ思索もち

倉敷市 野田素身郎

妻が来てくれて互角に物が言え
人妻という落ち着きへ口ごもり

真相は知らず知らず酒を酌み
喫茶店僕にも今に連れが来る

諫早市 川岡靈眼子

美談にも嫉妬を入れる口があり
倅せは自らつくる掌を合せ
バフ叩く胸から乳房に子がさがり
悲しい計聴く日よ菊の雨にぬれ

富田林市 岩田美代

あきらめがすぐに出るので腹が立ち
百円で神のお告げのありがたし
ツンドクの部屋にピカソも掛けてある
もう一押しそこでホロリと又させる

出雲市 原独仙

毒舌を坊やに吐かせ腹話術
脂肪探るうなぎ うなぎ屋瘡せている
冗談も言えぬ性とは不憫なり
出稼ぎへ送ってやりたい青田風

大阪市 酒田清子

息抜きの筈の休暇をくたびれる
被害者が加害者だった馬鹿らしさ
悔しさを唇噛んで今の地位
腹巻きをして宇治金時のお替りし

愛媛県

渡辺 曉 童

モーニング五尺五寸は是非ほしい

黙殺をしとけば勝てた顔でいる

溜め水の減るごと貯金帳の残

七円の義理が気になる暑氣見舞

下関市

桜川 不 水

朝顔に手がかり欲しい風があり

逆立ちをして蜜蜂はかきまわし

蹴飛ばせばカンカラカンと派手な缶

川舟へ手を振る橋のハイキング

京都府

大鶴 喜 由

あきないも恋も得心させる街

夏山の朝のさえずり夜のかじか

有難き平凡　なが患いの過去

高級車と農耕機すれ合うも新開地

竹原市

小島 蘭 幸

なにもせんでええから見てて欲しい人

面白いことならなんぼでもしゃべり

悪友が次々帰省してお盆

グループで歩くと不良じみてくる

出雲市

尼 緑之助

ごねるより他なき象牙の塔という

温室で開き安保につき当り

天下りどころか定年の職探し

多党化の火花は芽えず曇り空

松原市

谷垣 史 好

大言壮語のわりに寝相のみすばらし

われながら不器用な抱擁と思ひ

故郷墓参

蟬しぐれ金では買えぬ夏があり

登りつめたとこに墓あり浄土あり

藤井寺市

西 いわを

石垣の大きさ小ささも理に叶ひ

組紐の一筋ゆるみ美が缺ける

仮縫が出来ない人の進む道

歳とって呼吸のし易い処で住み

鳥取県

森田 布 堂

いろいろな顔に先生写生され

小説にいい名があつてそれをつけ

笑わせるために笑わぬ芸の道

夕立が降りそう蟻の列急ぐ

笠岡市

松本 忠 三

出張をとんぼ返りで命ぜられ

公害は無いが藪蚊に血を吸われ

卒業に多分をつける子の自信
注ぐ真似をさせ乾杯の女事務

京都市 松川杜的

人生の流転を秘めて誕生仏

人間ドック入り岩木病院九階病室にて

有難し二日で全身診てもらい

気の早いネオンタ焼空にもう灯り

九階の夜も貨物車眠らせず

八尾市 高杉鬼遊

横向いたままで笹舟流される

クーラーが無いので蠅も元気です

肺ガンが何だピースのテープ斬る

お茶の値を聞かされ勿体なくよばれ

大阪市 山川阿茶

盆踊りここにアロハにサングラス

死んだあとの整理思うて整理する

絆断ち単細胞に似たくらし

米子市 林瑞枝

背をさする母との対話過去に触れ

手鏡にやつれ写して伏せて寝る

愛の文字言葉にすれば芝居めき

堺市 高橋千万子

すぐすきになると母親無理なこと

かへ一重隣りのベルに走らされ

まちぼうけ郵便受は知っている

兵庫県 大江秋月

マスコットだけ無事だった事故現場

うぐいすの声が変わった山の夏

夏バテをはね返してる登山靴

京都市 都倉求芽

例えばの話で本心打診する

打ち明けた口へ涼しいかき氷

商いが済んで商人の声変る

小松市 馬場魚山

盆近く仏に済まぬ墓のこと

思いきり走って見たい足を病み

漬物がなくて平気である世代

西宮市 若林草右

若い嫩をかばう枯葉に春近し

老母病む

食欲へ齒のない口がよく動き

妻あわれその母あわれ夜もすがら

兵庫県

磯野与志

広島県

高橋鬼焼

終点まぎわに乗換るも運命か

ママの留守パパは娘にしてやられ

ようこれはこれとは土の手を洗い

久留米市

永松道雄

高石市

谷沢好祐

苦勞した皺とは見えぬ顔のつや

若鮎の流れにおどる水の音

うつぶんを軽く晴した夜の月

岡山県

出原敬一

和歌山市

西尾公作

秀才の眼鏡の縁が氣にいらす

あの頃が暮しよかった古写真

一票差落選ライバルの祝辞聞く

米子市

八木千代

鳥取市

河村日満

ライバルに病まれくらしの張りが抜け

テスト今日済んで明るい子の昼寝

おくびにも出さぬ未練が渦を巻く

岸和田市

葛城伊三郎

大阪市

金井文秋

素面ではとても云えない忘れ物

夜る迄はとても待てない子の火花

よい嫁を姑無口にしてしまい

脱げるだけ脱いで我が屋の風をより

負けて勝つ術をおぼえて妻無口

とほとほと炎天をきて又迷い

逃げ出せば死が待っている十姉妹

氣に入らぬのが触ってもおじぎ草

今晚の飲むきっかけにするアポロ

腕白をする子に見えぬ昼寝顔

大文字終ると義理に秋が立ち

ボーナスが家計簿にちよつと義理を立て

あの月に人が動いているテレビ

有福温泉にて(二句)

四階に風呂トポトボと昇りつめ

ここにまだトンボが居てるなつかしさ

孫だけがお金持ちやと云うてくれ

女性上位男はおだて上手なり

水虫に何年越しか居座られ

門真市 福島鉄児

こりこりと云うてる男にまたかかり

まだ若い肌持て余す白髪染

見合すんで別の女とするデイト

大阪市 河井庸佑

さりげなく言うひとことで気をもたせ

どうほめたらよいかわからぬ軸を出し

不自由な山のキャンプへ家族連れ

奈良市 村上春巳

太陽へレジスタンスの水を打つ

美容師に十二神将の髪かたち

バンビうとうと立派な角に囲まれて

桜井市 岩本雀踊子

停年のない仕事場をさげすまれ

夏の陽に仁王の足もだるからう

貧乏を苦にせぬ妻が鯛やく

宝塚市 小島桃路

無聖改め

誕生日聞けば悲憤の原爆日

日曜もつい忘れてた夏休み

午前中という支払へせく律義

大阪市 天正千梢

群集にもまれて一人ぼっちなり

あたえられた命もてあます午後

御岳神社参拜

三千米神と杖にささえられ

岡山市 田村藤波

なぜ死んだとはたずねる方が無理

お手伝いの涙は枕が知っている

何流でもよい花のある玄關

笠岡市 木山遠二

不遇の身近頃声も小さくなり

行く気なし月はこっちで見えるつもり

危きに近寄り蜂にさされたり

高槻市 山田季賛

算数じゃ解けぬやりくり聞かされる

見栄が有るからやりくりもする妻の愚痴

結局は又借りて来る金詰り

姫路市 隠岐不酔

どう書けばくれるだろかと子も苦心

税務署は酷めておいて別れに来

尻撫でて叩いて西瓜売られたり

鳥取県 清水一保

雷を遠くに聞いて憩う雨
俺の分も泳いで来いと子を送り
俸せが寄って賑う土用市

松江市 小林孤呂二

スカウトは勝ち負けも意識している眼
なるほど赤字グリーン車に人を見ず
犬飼うて犬の素性へ持つ誇り

笠岡市 出原真奇

義姉ガンで死す

一人旅砂丘へ伸びる影をふみ
人間にふまれた月を仰ぎ見る
本当にあなたが好きに踊らされ

ハワイ 上田紅溪

挨拶に客席まわる如才なさ

アポロ十一号

ニクソンが月へ電話の始めなり
お名残りに月へ梯子を置いて来る

美禰市 安平次弘道

ペンダコがまだまだ太る平社員
想像におまかせしますと気を持たせ
裏の裏考え無策にしてやられ

香川県 岡田拳法
噂もう薄れた頃と穴を出る
中古車のどう飾ってもあわれなり
同じ路線歩まず別れもせず夫婦

大阪市 今西章雅

小さくも持家犬も猫も飼え
習性は仔猫も畳で爪を研ぎ
ど忘れへ厚意暑さのせいにされ

熊本県 有働芳仙

鍵かけて出るのを盗人待っていた
偉いもんや女が脱ぐと金になり
外遊はあちらの恥部を見て帰り

大阪市 福井野迷路

沖繩へ文句千島は御意のまま
振り向けば人生行路霞んでる
脳軟化悟り切ってるプロフィール

大阪市 川口弘生

先輩茂莉茂次郎氏急死
今日からは休診ですよという遺影

伯父善助百力日
出席の案内状を紛失し

女房もビールが旨いと褒める夏

松江市

岡崎祥月

馬鹿でないが笑ってくらすことに馴れ

老の坂苦勞の橋に蹴つまずき

人の苦をせせら笑っている他人

岡山県

横山一声

長生きをせねばと月へ行く話

自家用車が待ってる免許またすべり

内職のお金が特価品に消え

堺市

藤井一二三

夏やせも亭主の甲斐性のせいにされ

風鈴に風のありかを教えられ

涼しい顔して上役は無理を云い

堺市

新谷笑痴

若狭の旅より

地元では出来ぬ土産を知って買う

草いきれ分け分け秘仏拝む汗

サッカーの練習へ息子が行く

ひきずった脚を根性に支えられ

今治市

越智一水

腹立てて急に仕事がしんどなり

夏風邪の裸少々もてあまし

三つ目の恋はふられるがわに立ち

大阪市

宮尾あいき

捨猫のひろうて欲しい声になり

籠のせみあきらめきれずやけに鳴く

うら盆の読経へ虫も声を和し

伊丹市

小川静観堂

墓地公園のお供え実には多也

老妹（舞の上手）死す

いま頃出棺か仏説阿弥陀経

老婆の新盆へ老妹も合祀して

新盆へお客が一人賑やかさ

岡山県

池田古心

病状へ医者はテストの胃腸薬

嫌な奴奴も俺をそう思い

利用価値あるのか俺を九拝す

愛媛県

村上旭童

胃ガンではなかったらしい生ビール

補聴器がいるに福耳ともいわれ

蚊に負けて孫もう帰ろううかえろ

尼崎市

高津徹也

聞き流すこれはせりふと決めており
ポケットに小さくしまうわけがあり
今一度確めておく零の数

倉敷市

小幡里風

只二人砂をいじっていて飽かず
落し穴落しておいて振り向かず
ステテコで夜店をあさる裸銭

八尾市

古川鶴声

口程になく限界の自己悟る
遺影今兄さんと呼びたそう
呼び戻す声に返事の顔となり

松江市

柳楽鶴丸

スケスケルック女性上位のユニホーム
柿の葉寿司の味だんだん母に似る
銭湯を改名したい三十円

兵庫県

河原みのる

月 火星 やはり地球に住むとしよう

那智山参詣二句

御詠歌と雅楽マイクで有り難し
此の杉を陛下も賞でて撫で給い

堺市

伏見茂美

岡惚れもせずに帰った盆おどり
水虫も履いただろうに宿の下駄
バー街の昼見りゃ金の惜しくなり

和歌山市

野村太茂津

ぬけぬけと我が青春に悔はなし
相剋の心断絶と人は云う
もう御用おまへんかいなと胡摩を摺り

奈良市

宮口笛生

無事泳ぎ無事に帰って来たレジャー
打水のついでに朝顔水もらい

高校野球

応援の方が暑さにへばりかけ

西宮市

島居百酒

捨てたとは云えずお礼云うて受け
敬老日そっぽを向いて孫叱り
積立が少し蓄ってスケジュール

枚方市

宮川珠笑

子が寝れば賢母愚妻として拗ねる
女手で育てた恩を聞かされる
千鳥足内職の灯へしんとする

和歌山市

垂井葵水

家族みな個性が違ふ保健薬

煽動に乗る弱点も持ちあわせ

視度ためす吊広告がひるがえる

芦屋市

丸川初甫

老人ホーム訪問（一句）

さよならの声が遠のく坂を降り

乗り切った停年油まだ残り

国鉄妻鹿寮（元・家老の邸）

御家老の声聞えそう大広間

富田林市

浅川八郎

気まぐれが気まぐれでなかった三次会

れんげ畑気まぐれの双蝶とも見えず

法然の浄土は消えず七百年

大阪市

横倉富久一

雑草が無縁仏へ向いて咲き

逃げられぬ顔へこころの皺刻む

陽の当る場所を歩いている仮面

大阪市

室谷鉄舟

何思っているのか目玉よく動き

一匹の蠅へ昼寝がかんを立て

聖人のような妻なり息づまる

東大阪市

竹中肖二

停退がチビた印鑑棄てきれず

老夫婦労りあった旅続く

国宝の山門恭しくくぐり

加賀市

細呂木魯木

定年は通信講座で出直す気

アルバイト社会の汗を知ったらし

大阪市

榊本路児

旧街道名残りの松もあとわずか

大原女も今日はデイトのハイヒール

大阪市

宮地双楽

太宰府に詣で

威張るなら蓋をしてみよ阿蘇の山

月旅行したが冥土はどうだろう

大阪市

西川誓二

エトセラー買物好きの妻を待ち

箸取る手とめて伝説聞くも旅

和歌山市

土谷城石

手放して跳上げた地価を悔しがり

銀行もちょっぴり儼約した造花

小松市

四才天弘実

残酷さ隠して女蟻を焼く

待合も完備火葬場人を待ち

東大阪市

竹中綾女

流燈の次々消えて闇せまる

地藏盆死んだ子の年一つふえ

★

清水白柳

蜂の巣へ近い裸んぼを叱り

俺の思想を金文字にしばらく

政治姿勢が票田へ来て変わり

荷造りの男結びも知らぬ助手

デザインは奇抜だが売り物にはならず

川村好郎

灯を消してみても邪心があざ笑

セールスの目にあげ底という構え

忠告もう余白のままにする手紙

大都会心も土から遠くなり

これしきのことはと己にはゆるし

西尾栗

「乙女の禱」の曲で来るごみとり屋

台風予報はずす風鈴の惜しい音

親切にするには余りに明眸皓齒すぎ

書斎哀れ艾の匂いこもるなり

盂蘭盆会倅せうすき次女なりし

北川春巢

盆踊り太鼓も無我の境となり

マイカーへ次はクーラーつけたがり

産み月が近づきミニの度も進み

種なしぶどうたよりないのも年かいな

過密過疎実状聞いて寒うなり

若本多久志

我を通す女へ婚期過ぎて秋

旅愁そこはか日帰りの超特急

古稀近い俺にフアイトを要請し

ある日ふと蒸発したい経営者

十代に社長の腹を見透され

菊沢小松園

強いこと云うても足がもつれてき

判って貰えぬ淋しさがはたち

先祖代々の墓へ許しを乞いにゆく

美しい風カーテンを弄び

生活のリズムが狂うほど儲け

ぬかずけば

高 鷲 亜 鈍

ぬかずけば亡師の声でよく来たな
業病にあらず酒と女のせいにする
花曇り師の福善寺を尋ねあて
きみは愛弟子ばくは鬼子だった墓前
箸とれば相手まかせの膳につき
天なく地なく息する深夜

座布団は一つ俺と己れと議論する
習えたら無論習いたい点字
これ以上世話はいらない点字
顔合してもどなた様かと尋ねられ
元の位置を動かしたらどもならん
おもい出す香林の死の美しき
身障者夫婦仲良く手を合わす
首をふるのに向いてあつて扇風機
酒とろり闇に吸われて闇に寝る
辛いけど手あり足ありありがたし
生きたくば暗闇などというとならず

川柳日記

麻 生 菫 乃

八月から九月へ

小径は尾根まで続く草いきれ
牛乳屋の瓶で目が覚めスイッチ捻る
鳳仙花田舎娘に似て赤く
起き伏しも朝餉も時差でゆく暮らし
雲出たり消えたり秋の窓ガラス
おとろえの空美しき茜色
テレビ終了こほろぎが鳴く



空息もやむなき暮のおりた音
暗がりを浮遊するのは詩の魂か
暗がりをいっばいに生くこのいのち
うかつにもトゲにさされて薔薇としる
身障金ありがたく勿体なくもお神酒
悲しいと思う一字は悲しい字
じんじんと雪が降るのをきく心気
いのちから二番目のめくらに慣れて無事
手のさわるとここに置いてく酒の類
ひっこみがつかぬ盲に頼まれて
頼まれるのが面倒な盲の家
雨やんで蜒蚰かすかに泣いている
公害の一つ黒い霧には不問とす
樹から樹に移りまた泣く油蟬
文字通り暗夜行路の地にすがる
あきめくらとはめくらになったまえのばく
盲となりごま塩の髭不精
天神髭いつか俺にも似合うだろ
軽蔑をされても己れが顔の髭
水の滴るほどに髭のびる
靴を履く友の背へ追いつく死眼
口手足動かしてるけどなにが故
起きているから大小便は自分でし
父 兄貴の死期に近づく末っ子のぼく
タバコをやめて髭いらうのが手慰み
抵抗はせめてもベレー帽と白い杖
コーヒのワンカップがあさりとひる
くるりくるり回転椅子に据りかね

川傍柳 初篇研究

(七十六)

前田喜代人 川端柳風
岡崎重義 故高須啞三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

581 齊うりあるいて来たが元ト手也

眠狐

清「なすな」は正月七日の七種粥に入れる七草の一種。「守貞漫稿」によると、六日に困民や小農が「なすななすな」と売りに来たのを買って、七種粥をつくったとのこと。

つみ草の商売人はみかんかご
齊うり此上ねぎるところなし 一三・36 一〇・34

此頃の雪でときばるなづなうり 一三・14
などと、とにかく、ささやかな商売であった。

高須「俗に「べんべん草」といわれる春の二年草。ふだんは雑草だが七種の時期に限り売られる。だから元手なんかかかっていない。野原から町までの運び賃が元手というわけ。

前田「あるいて来たが」うまい。

丸・岡田「賛」。

582 やれ夫レといふ内にはふを蹴破り

一甫

清「渡辺綱が鬼に腕をとり返えされたところを詠んだ句。腕をとり返えした鬼は、伯母の姿からもとの鬼の姿になり、破風を蹴破って逃げ去ったとのこと、それ以後、渡辺覚は家に破風を作らなかつた由。破風は屋根の切妻についている合掌形の裝飾枝。三人へ面目ないと破風をやめ 拾五24

高須「破風を蹴破り」だから、ほかに考えようはないが「やれそれといううち」とは何と拙い言い方であらうか？何かモトが

あって、その文句取とまでゆかずとも当時はやった洒落か何かではないか。

丸「磯稿に賛。「やれ夫レ」には、やれのそれのとうろたえさわぐさまが出ていて、それほど拙ないとも思われない。

岡田「同」。

583 夜着を洗った晩はたわいなし

門柳

清「恥しい最中の嫁。そして夜着を洗った夜のことだから、その恥しがりよりも最高藤井「たわいなしは夜着を洗うのは重労働だから、つかれてたわいなく眠るだけのこと。恥かしいどころか、なんの欲得も乏失した状態をたわいなしといったのだ。それこそ、その夜の御亭主へのおつとめなどはうわのそらのことだろう。

川端「前後のことであらう。汗ばんだ夜着を洗って、今夜はたわいなく眠ってしまった。

高須「「たわいなし」は、とりとめがないでたえがないということだから、藤井・川端説の逆ではないか。寝具を清新にしたので、夜のいとなみも、ついタワイなくハメをはずしたと解すべきではないか？

夜着きると姿は智慧が分に出る 一〇・21

前田「「たわいなし」はとりとめがたい意

にとりたい。即ち、はずかしさとか、はめをはずすとかいったようなものを超越した感じである。この句、情緒的で艶があり、「洗った晩は」の「晩」はの響きも見事である。

丸井前田説贊

岡田〓同。藤井説の通り。電気洗濯機でしぼるにも、夜具の皮など老婆の苦勞を見かね、小生が手伝う位です。ましてそういう便利なものない頃は、よく台所から女房に呼ばれ、夫婦共力で両方からしぼったりもした。新妻の疲勞熟睡のほどもお察しあり

584 一筋に見たいてひんかうな機敷

菅江

藤井〓「ひんかう」は「ひんこう」「ひんこん」ではなからうか。評判の芝居見たきに最下等の機敷で観劇した。今でも芝居通は立見席で一幕見るのをよしとするが、年に数回しか巡業しなかった昔の芝居は、せめてよい席で見たかったらう。同様な句として、「りんしょくな機敷くつき合って居る」(傍一42) いずれも切り落しで羅漢台のような席である。

川端〓「ひんかう」は貧困とか貧弱の意と思う。「ひちな機敷くつき合っている」高須「ひんかう」は「品行」でおとなしいこと、真面目なこと、と三面先生はいっていられる。「ただ夢に見るまで」で、本当に見に行ったのではなからう、との説

である。この句の表現「見たいて」は「見たいので」であるから、その方が適切と思うが、総体の感じは、やはり「ひんかうな機敷」が判らぬ。

前田〓「ひんかう」は川端説の貧弱に賛。ただ芝居が見たいので、場所などはどこでもかまわぬ意。

外聞のわるき機敷へ立ってゐる 一六・30

つかげと見も機敷へ立って。安永清〓句の解釈の面からすれば、芝居見たきにどんな席でもかまわぬという前田説に賛成する。しかし「ひんかう」については、索引を見ると「貧公」とされている。すると貧公は「銭のない連中」と解すること

もできる。従って「貧公な機敷」は「貧乏で金のない連中が座わる機敷」となり、句のために、機敷の上下は問題としない、ということになるのではないか。

丸〓向機敷の追込みにつつ立って見ている看客を批評しての作句。まだまだ芝居が見たいのであんなけちな機敷に居るのだらう。見え坊な江戸っ子の一面がうかがえる。「ひんかう」はやはり貧困であらう。

なお礎稿年に数回は数カ月であらう。岡田〓「ひんかう」は数カ月コトバは、この「川傍柳」初篇と同じ安永九年に出た洒落本「多佳余宇辞」にも「脈をまげて枕画の新のもの、ながめ入ったる貧幸先生……」とあって「貧幸」の字があてられている。

当時は普通に用いられていたコトバラし。あるいはその字通り、幸福・幸運には乏しく貧乏な……の意味で、貧幸の字が正しいのかも知れぬが、江戸時代の辞書などにも出て来ない。

585 八朔に帷子を着る運のよさ

眞弓

藤井〓去年までは八朔に白むくを着た太夫が、今年は落籍されて夏帷子を晴れて着た好運、季節をつかって女郎の好運の転機を示した常と句。同様な句に

八朔に涼しいといふ仕合せ 二三・3

なお八朔の白むくは綿入れで、季節はすれの着物であったから、帷子とか涼しいという反語が活かしている。

川端〓贊

八朔に帷子を着てうれしがり 四一・15

高須〓「去年は夢こんなうれしい生活あり」で、去年までのことを考えると、まるで夢のように暑い八月一日に、なんで白無垢なんか着たのであらう……と現在を謳歌している句であるが、その「八朔の白小袖」については元禄の頃、吉原江戸町一丁目、巴屋源右衛門の家の高橋という遊女が、そのころ煩っていったが、なじみの客が来たので、寝ていた白無垢のまま揚屋入りをしたところ、その姿がひどく艶麗に見えたので、それより八朔に白無垢を着る風が生じたという。

丸・岡田〓贊

44年度路郎賞受賞作品

足跡を残そう

砂のある限り

倉敷市下津井三五二

本田恵二朗

略歴

大阪市西区観にて十一年間医院開業中戦災にて落城、帰郷開業今日に至る。柳歴二十五年。

川柳塔社参事

川柳岡山社理事

鷺羽川柳会会長

倉敷市文化連盟常任理事

鷺羽ライオンズクラブ第二副会長



栄光の

路郎賞発表

中島生々庵

優秀句

足跡を残そう砂のある限り

本田恵二朗

準優秀句

父の歳より長く生き父を識る

後藤梅志

情熱の枯れた時 樹氷の

ようになりたい

酒田清子

も第一回中間発表からは一句、第二回中間発表からは三句、第三回発表からのが一句となっている。何かの指示を思わせるものがある。ともかく各選考委員の労を大いに多とすると共に、最後に最優秀句決定のために私の手許に届いてからの私の苦勞も一通りでない事はご推察できると思う。

泳ぎというなら平泳ぎの泳法である。しかも一掻一蹴り毎にきびしく自らを律してゆくところに彼の全面目があるのである。こんどのこの優秀句を読み返していると、ほんとうにそこに恵二朗の川柳があるのを感じる。些かの躊躇するところなく路郎賞に推した。

本年度から一カ年分を三回に分けて、すなわち四カ月分から十句ほど中間発表する義務を各選考委員は担わされた。この中間発表を詳細に検討してみると、大体三、四句宛に三分されているが、中には一期間に二句しか抜けなかったものもあり、しかし四句以上抜けたのはない。また優秀句として推せんした一句

路郎賞推選句（十句）

北川 春 巢

推選句

鉄カブト親父は覆面せなんだぞ 花 村

この句は、大学紛争の、ヘルメットを被りマスクをした学生を詠んだ句である。「鉄カブト」といふ「覆面」といってももう若い人には通じないかも知れない。これらのことはもう死んでしまったことではないか、と思われる。その故に、わたしはこの句を推選する次第。戦争を経験した者にとっては、戦時中、鉄カブトは堂々たる武器であり、それを被った勇姿は誰にも見てもらいたいぐらいのものであった。それになんぞや、現在ではマスクをして顔を隠さねばならないとは……。マスクといわずに「覆面」といったのもよい。戦争を知らぬ世代の人々にもこのことを知っていてもいいもの、と、第一位に推選した次第である。

準推選句（九句）推選順

(1) 献眼をした目だウインクなどすまい

恵二朗

(2) 打明けてくれた十字架ともに負い 千 代

(3) 橋渡しアフターサービスうるさすぎ

十九平

(4) 水虫とストレスのまま退官し 没食子
(5) やりくりがついたか又も法螺を吹き 酔 升

美 代

(6) 株が好きで色気に入るすきがない 遠 二

(7) 山椒をもらい筍買いに行き 拳 法

(8) 考えは変えずに名前だけを変え 百 酒

(9) 去る者を去らせば独りだけとなり 今年に二賞の推選方法が変わって、今までに二度に亘って候補作品を発表してきた。発表された句を見ると、各選者によってだいぶんばらつきがあった。当然ともいえよう。しかしわたしだけについていえば、一回に十句発表しようと思えば、チェックした句は、一回六、七十句に及んでいた。その中からわたしなりに各十句宛候補句を選んだわけであるがそこにわたしの「好み」がはいっていたものもまた当然であろう。発表された所を見ると、各選者の候補句とはかなり違った様相を呈している、わたし自身もちよつとそう考えた。がよく見ると、各選者の候補句も、大部分はわたしのチェックした句の中にはあった句である。結局、最後の詰めの際にはわたしの好みが出たということで、わたしには納得がいった。

ここに発表した推選句の十句も、前に発表した候補句の中からも取ったので、他の選者の推選句とはかなり違っていると思うが、それがまた興味のある所であろう。しかし根本

選を終えて

若本多久志

路郎先生が亡くなられてすでに四年の歳月が流れたが、年と共に先生の「偉らさ」が段々深く感じられるようである。

「川柳は人間陶冶の詩である」したがってその作品には「人生がなければならぬ」という、ご薫陶が古稀近い我身にひしひしと迫る。

そんな想いで最後の十句を選び、推薦句と準推薦句を決定した。おそらく草葉の蔭から先生が「お前の川柳鑑賞も、まだ甘いぞ、甘いぞ」とおっしゃるような気がするがとにかくベストを尽した点、汲み採って頂きたい。

四四・八・三一記

推薦句

父の歳より長く生き父を識る

後藤 梅志

準推薦句

何気なく降って五月雨慈雨にされ

清水 一保

結局は釣書のいらぬ人へ嫁き

背をむけて寝ても信じ合える仲

大根の宿命重石と塩に耐え

木枯よ吾子の墓標よけて吹け

伊予緋妻へ選るのも旅なれや

神様に似たのが交りまとまらず

栄枯盛衰なめつくし苔黙す

女の直感へ男さりげなく

西 いわを

天正 千梢

原 独仙

宮尾あいき

川村 好郎

坂井 三葉

正本 水客

久米奈良子

詩的な句

川村好郎

最終に選んだ十句はすべて私の心をこらえて離さない句ばかりであるが、殊に鬼遊氏の「足るを知る花びら風に逆らわず」。水客氏の「さりげなくさりげなくお茶をいれている」。それと推選句の恵二朗氏の句は最後の便箋に書き残された。そしてこの中で一句を選ぶのに苦しんだ。私としてはこの三句を推

選句として提出したかったが、そうともならず結局人生行路力強く歩む姿を詩的に詠みあげた恵二朗氏の句を第一位に推した。

(最終十句)

一本にしほれば義理がからみつ

すすきとの対話愛憎さえ空し

さりげなくさりげなくお茶を入れている

わが坐すは弥陀の膝なり策無用

もみじ葉にすれば尽きんとする命

愛の証しさぐれば揺ぐばかりなり

なに考えていたのかわが家通り返し

彼岸会の無音無明は亀にあり

足るを知る花びら風に逆らわず

足跡を残そう砂のある限り

小幡 里風

三井 酔夢

正本 水客

麻生アート

吉田 水車

久米奈良子

不二田一三夫

橘高 薫風

高杉 鬼遊

本田恵二朗

選後感

うれしいな

本田恵二朗

『速達へうれしいびっくり申し上げ』

本年度の路郎賞に選ばれたことを、一三夫さんが、速達で知らせ下さった。丁度その時、朝食のテーブルで、パン、チーズ、牛乳と取組んで、午前中のスタミナ製作中であつたが、けさの食事のなんとおいしたことよ。こんなおいしい食事にありついたことは、どう思い返してみても、一度も無さそうだ。正にバンザイである。私の表も裏も知りつくして下さっていた、路郎先生の温顔が、目の前に、クローズアップされて、私はわけの判らぬことを、喋りかけている。先生は目を細めて聞いて下さっている。朝食がやたらに、おいしかったり、路郎先生に、やたらに喋りかけたり。これはよっぽどうれしにちがいない。同時に、選ばれた句の通りを、実行することが私の総てだということを再確認したものだ。

『老妻へちよっぴり威張る種ができ』

耳濡らす涙生涯仰臥の身

まだ恋の目でないことがもどかしく

人類の太古もやはり石を投げ

どないしてんねんやると不義理の人間じ

薫風

一三夫

鬼遊

鉄児

西尾 栞

表 発 賞 郎 路

無一文の頃の貴方が好きだった
黒白をつけて気まずいことになり
素身郎
貨車去つてからの陽炎位置をかせ
葵 水
ふすま半分閉めてひとりの城つくる

師をおもう生駒の山に雪のころ
千代
奈良子
推薦句

情熱の枯れた時樹氷のようにになりたい

清子

今年の炎暑の中を湧きに湧かした、高校野球の優勝戦の延長の時に、優勝旗を二本作れという声が叫ばれたが、路郎賞もまた路郎賞を三つ作りた作品揃いで、ここ二日、一時就寝五時起床の選句は嬉しい悲鳴だった。遂に推薦句は清子氏の句になった。氏は毎月の作句に見られるように、目下入院中で、どの程度お悪いのか知らないが、筆の重たい日もあるうが、病魔と闘い作句される真摯な姿に敬服している。句の説明だが、こんな良い句はむしろ説明せずに、何回も何回も詠んでもらいたい。この句は一回読んで判る句でなくまた何回読んでも判らないひとりの句でもない。何回も何回も詠んでいる中に、心の共感をしみじみとおぼえる句である。元々定形を重んずる私だが、字余りのこの句にちつともその抵抗を感じないのは句品というものだろうか。その外三つの路郎賞の一つは、奈良子氏の

師をおもう生駒の山に雪のころ
である。七月号の私論柳論の梅志氏の、蔑乃先生を、おまわれる言葉とこの句とを合わせ見て、常々、先生を慕うわれわれ弟子の心を、詠い上げて遺憾なしとして推薦したい一つだった。また千代氏の、

ふすま半分閉めてひとりの城つくる

半分閉めるところ、肉親愛か嫁姑の気がねか誠に温かい川柳らしい一句で、三つの路郎賞の一つの句であった。

菊香蘭句 佳什十秀

菊沢小松園

土壇場になって他人にまた戻り
争っているとは見えぬ蝶二つ
故 十九平
推薦句

黒白をつけて気まずいことになり
近付いて富士の素顔に裏切られ
補乳器で育ち乳房を振り向かず
汐風の執念松を地に這わせ
人形師時代を悟る眉も引き
今日からは秒針のない暮しせん
雨垂れの落ちねばならぬとき光り
ほしがれいとことん搾取された貌
一年一度のまた無理な難儀な日がやってきた。不可能を可能にする日だ、兎に角何うに

か十句を選出して肩の荷を下ろした気持ちだ
他の選者の方々も恐らく同じ気持ちだとおも
うそして後味の悪さもまた同じことだろ
う。

一年間の川柳塔のうちからこれと思う句をチェックして五十八句、それを三十句に絞り十句にする、無理は初めから判り切ったことだ相当に肩の凝る辛い仕事だ。毎晩遅くまで家族の者に笑われながらやった、好きな道とは言え余り賢い人のやることではないと言つて阿呆ではやれぬことは確かだ。類句や暗合に気を付けても所詮人間は神様ではない、今月の句も暗記できないものが何うして三年も五年も古い他人の句が判つてたまるか、早い話が天下の御歌所寄人で文学博士、しかも博覧強記で通つた人も、他人の歌を剽窃したのを選歌に推した。その上、寄人は一人ではない相当な収入を得ているプロの第一者級の人が小っぱけな地方の同人誌から突込まれて急に宮内省から取消された事があつた。間口の狭い短歌でさえ斯くの通り、僅か十七字よりない短詩型で、同巧異曲の句まで気にしては句は作れまい。要は半歩でも一歩でも前進した跡があればそれで結構、模倣と改造は日本人の長所であれ決して恥しいことではないと思う。そこに明日への発展と進歩があるのであつて不慣れや不注意による暗合や同巧異曲を気にしては川柳の社会進出など

あったものではない。私はいつもおもう選句などは誰がやっても絶対的なものでは決してあり得ないと、併しながら人から注意され指



44年度川柳塔賞受賞作品

宝石の悲哀

永住権がなし

出雲市鑑町

王

紫

たいと私は選句しながら考えた。

×

×

略歴

昭和四十年十一月、竹内李明氏との御縁で至つて気楽に作句を始め、翌年三月いずも川柳会に入会、折に触れて尼緑之助先生に御指導を戴き間もなく近作柳柳に投句、菊沢小松園先生より事宜を得た御加鞭を賜わり、清水白柳先生からは旅先から何時もお励ましのお言葉を頂戴いたし今日に至る。

大正十四年八月島根県瑞穂町に生る。主婦、家族・主人、一男、実妹の四人暮らし。

川柳塔賞

ここに決定

清水白柳

今年度の川柳塔賞作品は、三回に涉り中間発表で候補作品を選び、その中から各委員が最終的に十句にしばり、その十句の中から推

選句一句を提出することになったのはご承知のとおりである。当日選考委員の提出した推選作句を選考委員四人(市市場没食子氏欠席)が慎重に該当作品を定めることになった。そこで推選作品の作家、浜口志賀夫、樋口一峯、両川洋々、王紫の作品と、中間発表に八句以上推されている作家の三宅不朽、森居善居、八木千代、堀江正朗、堀江芳子、小砂白汀、小谷葉子の作品とについて一句一句討論した。その結果、作品は定まらなかったが、薫風と白柳が推せんした、王紫の作品のどちらかに定めることになった。その作品は

続篇も続々篇もあるきずな
宝石の悲哀 永住権がなし の二句である
いろいろの意見も出たが、各委員の了解のもとに宝石の句に落つたのである。

中間発表で多くの句が発表されておりながら決定的な一句がなかったために、推選を選した各作家の方に来年度のご精進を期得したい。なお次点句は、水客、古方両選考委員の推選句を推すことになった。

優秀句

宝石の悲哀

永住権がなし

王

紫

準優秀句

縫い上げて羽織つて妻のものでなし

両川 洋々

何げなくいっしょに洗濯してあげる

樋口 一峯

推せん句

宝石の悲哀永住権がなし

王 紫

候補句

ささやかに生きて針目を乱さない

克 枝

棺覆うて評価を受けるもの持たず

白 汀

家庭教師の居眠りを起さない

孚 彦

俵が消えそう貝殻に手をふれず

葉 子

病歴を語る女患の目は見ない

清

さくる裂く指は男に見せまじき

不 朽

こんなに倅でいいのか長男との対話

芳 子

運のいい子で東大を去年出た

八木 千代

闘病十年誰かの植えた柿がなり

若 芽

句の姿

市場没食子

時代の変遷につれて、詩歌 分野も多分に

その影響を受けるのは当然で、柳界においても知的な表現や、叙法、それにそのうちに死語の列に入るであろう新句語が生れてくるのも不思議ではない。川柳が記録文学の一端を担うとすればなおさらにこの傾向は強いだろう。私の選句重点が句の姿にありといつても内容無視では決してないし、いままどこかで見たとか、有ったなど句いのする句や、月並、平凡のそしりを受けそうな句には手を出さない。

凡そ句の説明なんて野暮の骨頂で、句は詠じて肌を感じ、心の琴線に触れなければ名句とは言えないと、先輩から聞いたし、読んだりが、素人にはそう簡単に、通ぜず、映ぜずで、説明を求められる毎に、浅学非才その上口下手ときている私は、いつも平古たれる。難解の句はまだしも、一読ビンと判り難い句は敬遠したくなるのも、是非ないことと自慰している。是非ないこと、言えはこの選で一人一句主義を採ったので、二、三の作家の優秀句が重複のため割愛させてもらったことを深くお詫び申し上げます。

推せん句

師の影を踏まぬどころかつるしあげ

浜口志賀夫

三尺下って師の影を踏まずは昔のこと、大
学法の制定を招くほど長期間、学生のゲバ暴
挙は内乱の様でもあり、安保をひかえてまだ

まだ一波瀾も二波瀾もまぬがれそうもない。

狭い視野ながら母の目ゆきとどき

八木 千代

冬眠もしたかる紙幣のくたびれて

小谷 葉子

最後のアングルやはりあなたも裸体

前田英巳代

地位と金浮気しそうで氣を揉ませ

林 瑞枝

歩き出した頃から隣りと比べられ

岸本豊平次

腹の立つ妻と一緒に乗り遅れ

山田 止水

大胆な道草をして嫁にゆき

飯田 一治

たぐりよせてみれば結び目ないえにし

岩谷二三枝

地価跳ねて先祖へすまぬ氣をおこす

森井 菁居

一年間の佳句

正本水客

地にふれて雪あたたかさにうろたえる

脇本 政己

倅が消えそう貝殻に手をふれず

小谷 葉子

風るるるると葦の葉にうたう

小砂 白汀

人間陶治

戸田古方

川柳は人間陶治の詩、人作りのための詩、人間反省の詩であり、幸福へつながる詩であるとも考えている。切り捨て、切り捨て選び抜いた十句から、さらに一句を推すことはほんとにむづかしい。兎に角、付け句のような寸評を各々に添えてみる。

ざくろ裂く指は男に見せまじき

竹原市 三宅 不朽
マゾの世界の美しき妖。

夢をいれたはずの小箱合鍵がない 前田美巳代
終い風呂溢れ洗濯したくなり 堀江 芳子
寝てしても損したような宿を發ち 有信新之助
よいしょと立てばよいしょと猫も起き 谷垣 史好
旧道の無縁稼から冬に入る 八木 千代
灯をつけていいよと夕日傾けり 大峠 可動
推選
縫い上げて羽織って妻のものでなし 河川 洋々

華やかな訪問着でもあろうか、針仕事に精を出す妻の後姿が美しい。だが、そこにはいささかの暗さもない。生活の楽しさが「羽織って」の四字に凝集されている。何のてらいもない素材と表現が私をとらえる。

レンコンの穴の配列他意はない

島根県 小砂 白汀

その真実に不思議みつける。

誰も見ていないと思う大あくび

島根県 堀江 正朗

お隣さんも大あくびする。

劣等感わく日風呂の湯溢れさせ

竹原市 脇本 政己

せめてどっかにほしいぜいたく。

鳩の巣を残して庭の手入れさせ

岡山県 川端 晴女

露ちり程の聖者でもなし。

子が留守になれば人形にもどつて

和歌山市 飯家 和美

人形はいつも人形なりけり。

同じ餌ばかりを金魚あきませず

羽曳野市 麻野 幽玄

また豊作にこまりはてけり。

俺の顔見上げて仔大用を足し

西宮市 加納 聖司

オーチンチンは可愛けりやこそ。

鳩は鳩なりに苦労がつきまとい

竹原市 森井 菁居

見えぬところで水鳥のあし

推薦句

なにげなくいっしょに洗濯してあげる

守口市 樋口 一峯

空気味のわからないまま。

王紫さんを推す

橘 高 薫 風

推薦

続篇も続々篇もある絆

宝石の悲哀永住権がなし

工場が昔栄えていたポプラ

後進県銅像の数豊かです

これは無形文化財のようなやとな

後釜は何日までさん付けしてくれる

寝たふりで母娘の話おもしろし

たぐりよせてみれば結び目なきえにし

披露宴牧師ひとり酔わぬ人

彼岸花父の墓には赤すぎる

(評) 候補句十句はそれぞれに味わい深い佳句である。紫さんの前の句は、親子の、夫婦の、あるいは人生一般の太い絆の存在をドラマチックに、続篇、続々篇と表現したところが巧緻である。一読して句に奥行きと重量感がある。発想に表現がびたりと嵌まりゆるぎがない。後の句は、所有者が次々と変る絢爛たる宝石の悲哀を捉えて、句の裏に、豪華な生活を送りながらも、永住権を持たぬ人物を(あるいは作者自身であろうか) 淋しく見つ

めている作者の姿勢を感じさせる。そういう巧み技巧がよい。王紫さんを推す所謂である。

私が推した候補句の作者の外に、鱗魚、止水、洋々、芳子、不朽、政己、菁居、葉子、千代、タカ子、克枝の諸氏が、選衡委員に屢

々とりあげられ、来年度の受賞へ大きくクロズアップされたことを附言しておく。

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 六月号
至 九月号

路郎賞候補作品

北川 春 巢

合理化と言うけどものにいたためられ

くだまきに吉野まで来るほど平和

神様に似たのが交りまともらず

山椒をもらひ筍買ひに行き

仇討ちのように連休駆け廻り

命から二番目着ずにまたたみ

株が好きで色気に入るすぎがない

この歳になってかたはんなおるかい

打ち明けてくれた十字架ともに負い

愛すればこそと好物食べさせず

神様に似たのが交りまともらず

与呂志

水 洞

三 葉

遠 二

緑之助

要 次

美 代

鉄 舟

千 代

礎 山

若本 多久志

三 葉

栄枯盛衰なめつくして苔黙す

巡礼の一人拾うてバスゆれる

着替えても蠅魚屋を知っており

頼れるは自分だけとは淋しすぎ

雑念の中の女は脱いでいる

人生薄暮無性に人に会いたい日

女の直感へ男さりげなく

子が逝ってから地蔵さんへ掌を合わせ

何気なく降って五月雨慈雨にされ

川村 好郎

顔洗う時に心も洗う朝

一本にしなければ義理がからみつ

だまされる笑顔も母は持ち合せ

お母さんに会ってと女一途なり

喜ぶかにらむか白髪染を買ひ

働けるまだ働ける独り言

半数は喜んでゐる送別会

足るを知る花びら風に逆らわず

水 客

春 巳

実 男

弘 朗

白 柳

静 馬

奈良子

藤 波

一 保

い わを

里 風

柳 子

史 好

清 夢

恵二朗

素身郎

鬼 遊

回転の木馬となつて暮れかかり
職場結婚急に会社がせまくなり

西 尾

栗

師をおもう生駒の山に雪のこる

女なるかや猪首にも首飾り

つくばいの水で木賊がよく育ち

貨車去つてからの陽炎位置をかえ

今日も明日もぶつつけ本番で生きてます

アールト

幽霊の出たとこ団地の灯がともり

人生薄暮無性に人に会いたき日

骨壺の中に隠そうかと思ひ

仕立おろし能を舞うかと思われる

情熱の枯れた時樹氷のようになりたい

ふすま半分閉めてひとりの城つくる

一人乗る八階までの孤独感

静 歩
竹 青

奈良子

一 栄

初 甫

葵 水

秋 月

静 馬

芳 仙

水 車

清 子

千 代

旅 風

菊沢小松園

庶民とはまぐろの餌になるさんま
ほしがれいことん搾取された貌
咲きかけた蕾にまよう花鉄
人形師時代を悟る眉も引き
車降りここから悔みにゆく歩巾
隠栖はしが炎は消えやらす
資本家の姿鶴匠の綱さばき
今日からは秒針のない暮しせん
雨垂れの落ちねばならぬとき光り
入社した金の卵の二た月目

紅雨 史好 鬼焼 奈良子 好郎 靈眼子 弘道 水客 千翁 形水

川柳塔賞候補作品

清水白柳

病歴を語る女患の目は見ない
夫婦の対話そう言えは忘れてた
下向いて歩けば一人だけの道
輪の外のひとり天才かも知れず
落花盛ん激しき恋の終りかも
ラッシュアワー車掌の靴は光ってた
煙草一本くすねて二男出勤す
捨てた車券踏んでもゼニの音はせず
痴亭 瑞枝 千歩
男性のおしゃべりマイカー中にして
ほれるよなミニはいないねミニミキ

市場没食子

人知れずもみじ一葉炎えつづけ
葉子

戸田古方

地位と金浮気しそうで氣を揉ませ
錆びついた恋に重たいコンパクト
歩き出した頃から隣りと比べられ
法善寺むかし別れた妓に出合い
地価跳ねて先祖へすまぬ氣をおこす
職去る日労働多き目に出逢う
高血圧のお蔭で内風呂やと出来
川風が恋のしぐさを見てとおす
大胆な道草をして嫁にゆき
瑞枝 千代 豊平次 利美 菁居 功雄 黑天子 芳子 一治

正本水客

六月号から

夢をいれたはずの小箱合鍵がない
産めるだけ産んだ女房に先立たれ
落花盛ん激しき恋の終りかも
七月号から
何事もなしスードスタジオを出る
風るるるると葦の葉にうたう
寝てしても損したような宿を発ち
八月号から
握手してここから行けぬ手術室
ニコソンのぞろぞろ帰る日の高さ
縫い上げて羽織って妻のものどなし
芳子 白石 新之助 功雄 利美 英巳代

橋高薫風

雪どけの川に素朴がよみがえり
子が留守になれば人形にもどつて
太陽がほしくて菜の花窓へ伸び
わかめ売り去年と同じ声でくる
毎度有難う商売それでよし
流されてやろう勝気な水すまし
同じ餌ばかりを金魚飽きもせず
俺の顔見上げて仔犬用を足す
鳩は鳩なりに苦労がつきまとい
仕入する紙幣の皺は伸ばしとく
白汀 和美 文丘 草枝 克居 菁玄 幽司 聖居 一稔

ランドセルママは着物が出来ました

輪の外のひとり天才かも知れず
たぐりよせてみれば結び目なきに
伶人 不朽 二三枝 鱗魚

トルコ風呂君子あやうき所なり
後釜は何日までさん付けしてくる

愛とは別な妻の真心
下向いて歩けば一人だけの道
よろめいて居てガス洩れに気が付かず
千里 継之助 一路 止水 村瀬子 洋々

反省会という名目で酒が出る
孝行の一つは免許証取らず
柳子

近 詠

和歌山市 秋月宏方

須坂市 高峰柳児

孝行のつもり言い値で墓地を買う

凡人の笑顔ささやかな幸ぬくめ

獲物ひく蟻に掛声ほしいとこ

身銭きるたくらみ酔せられてから気づき

大洲市 米沢暁明

三味太鼓やんで瀬音と櫓のしきり

筆算でためしそろばん合うている

手の届く枝へ上ると蟬は逃げ

それとなく見せておきたい娘を連れて

今治市 月原宵明

涙線は耐えに耐えてる咽喉仏

人である不徳を包む絹の衣

あのビルに心の華が勤めてる

あの世まで楔る墓石の赤を消し

日附判廻して会社の人となる

凡夫妻愚問愚答をして笑い

逃げて来たように無人の駅をおり

月の石ニセの一号もう出そう

ハネムーン夫婦になって戻って来

今治市 長野文庫

ゴルフではない磯釣りに行く姿

分解掃除したいと思う記憶力

気の弱さ途中で酒を飲んでゆく

小松市 山上千太郎

其の時は悪友の名に甘んずる

飲むことに尽きて慰安の旅終る

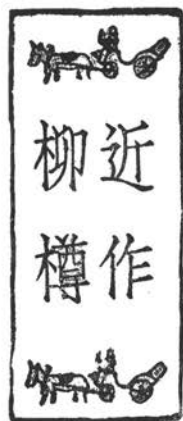
気の向かぬことも笑顔で過去にする

ご年配さんと年寄りひがませず

名古屋市 長谷川鮮山

法名も墓もじいさん気が早い

思ってたとおり誘いに乗ってくる



菊 沢 小 松 園 選

広島県 岩 谷 二三枝

今日を生きてゆくしあわせを梳る

生命なきモラル造花は炎ゆるのみ

生涯の徒劳か積木また崩れ

両の掌をころがり夢は日々褪せる

レジスタンスの蚯蚓が岩に干からびる

姫路市 前 田 芙巳代

真実は聞けない誤植の活字組む

指先の花粉重たく愛放つ

風はふりむいて慰ぐさめずに去った

吐く息に引火しそうな向日葵よ

たわむれに夏を告げて来てホタルの死

大阪市 小 谷 葉 子

十指みな虚栄のリズムファッションショー

断ち切った糸にまつわる蜘蛛の愛

入道雲都市の恥部をさらけ出し

五線符に家計のリズムのりません

スーツケース葬花を捨てて道さがす

大阪府 小 出 智 子

夾竹桃神が与えし色で咲き

シャボン玉母も一息空へ吹き

花缺この一枝は是非もなし

バーのママもう友達の距離でなし

竹原市 三 宅 不 朽

雲の峰こころ満つ日の遠廻り

恩讐のはるか身を置く雲の峰

又一ツ恋の足あと渚消え

金魚掬い金魚も必死にげます

東大阪市 宮 西 弥 生

原色のドレスマンションの夏は派手

山積みの仕事デートと板ばさみ

ひとり旅こころ影法師に話しかけ

愛の亀裂どこか歩巾が狂ってる

竹原市 生 信 笑 子

一人見る星は冷たいものと知る

夢にまで見た優勝を抱いて寝る
貸借がなくて友情美しい
冷房はないけど海風吹き抜ける

海の平和へ石などは投げまいぞ

竹原市 森 井 菁 居

グループの輪の外側で歩きたし

指文字で話せぬものへ目をつむり

今治市 渡 辺 南 奉

名案のないまま夫婦寝てしまい

見かけとはサボテン違うように枯れ
花ざくろ実らぬ恋に似てあわれ
願わくばずっと開いて居たい薔薇
改良をされたメロンの弱き性

大阪市 平 井 露 芳

左遷とは知るよしもない児の瞳

覗かれて覗いて団地の窓は暮れ

敗北の背に炎天の容赦せず

郵便番号書かせて郵便遅れさせ

島根県 堀 江 正 朗

抱きあげて空の広さを子と分ち

冷蔵庫出してからアイスノンとなり
本物は隠し偽物拝まされ

倉敷市 小 野 克 枝

よう動く義眼本気に見てくれず

花火見に行かぬ一人はへそまがり

妻の言うとおりの受話器に返事して

飲めぬ夫について一生飲みそこね

島根県 堀 江 芳 子

寺の雨病院のあめみな嫌い

寿命だと云って済ませるのは他人
飛び越せる自信を川に諭される

城下町古代求めて旅ひとり

神戸市 来 住 タ カ 子

何時しかに心引かれていた恐さ

双刃抱きただひとすじを駈ける寡婦

耳よ聞かないで泣かせるだけだから

女みな妬心に華麗な絹を掛く

鳥取県 川 崎 秋 女

触れてゆくものに風音逆らわす

妬心云わず背を向けて髪をすく
背を割って蟬太陽の中に出る

河内長野市 森 本 黒天子

こげ飯は一手に引受申し候

あやかして呉れても男の太い声

一言がとげもつ言葉で返って来

鳥取市 藤 本 和 宏

父病めば家業とする気の裁ち鈍

これだけの広さと知らず籠雀

妹にオルガン譲る時来る

鳥根県 小 砂 白 汀

ゲバふるう子等にも給う夏休み

親の目のとどかぬとこへ行きたがり

朝を出て夕べをかえって来る情性

八代市 船 木 史 朗

土曜日の夜は鍵ッ子夢を見ず

こんな日に税務署が来ないかと思

抓られて又飲みに来る肚を決め

大阪市 江 城 功 雄

限りある愛の終りを蟬しぐれ

人間不信街に心の虹探す

ムンムンと汗浮く肌のネックレス

大洲市 横 田 放 人

日盛りを蟬は狂想曲でなき

のれんつぐ社長は今も五つ玉

腰をふむ孫の重さが頼もしく

大阪市 藤 田 頂留子

打水に風鈴まんざらでない我が家

串の数ビールも女負けて居ず

土の香もうすれバター臭くなる民謡

大阪市 和 田 痴 亭

倅せなボートへ妬いた水しぶき

上布着て指にヒスイの母若かし

余命もうだから短気も許しとき

鳥取県 大 山 果 風

偶然の一致とうまくばつ合せ

雑草の強さに思う炎天下

老人のよくつまずいて笑われる

大阪市 黒 田 真 砂

夫の心手に取る如く夕涼み

触れ合わぬ心の糸の乱れ勝ち

意に添わぬ言葉返され夜を黙す

島根市 石 田 清 泉

傾いた墓石にしかと絡む蔦

まとまらぬ想いを乱すちぎれ雲

工場誘致青田のままを押しまくり

七尾市 松 高 秀 峰

スタートが失敗でしたと涙ぐみ

健康と云う財産もくずれかけ
骨までも愛してたに離婚の判を押し

和歌山市 増 田 めぐみ

思案して昨日も明日もない雀
鐘の音に居すまい正す京の人
愛犬に濡衣着せて事は済み

和歌山市 増 田 次 章

時が流れる足音がきこえない
転勤三年ここにも忘れられない日
スモッグの街夕やけに気づかない

松江市 大 峠 可 動

ふるさとの彼方で故郷を恋しがり
天に月地に虫窓に風ゆるる
風鈴のリズムを染めてゆく夕日

西宮市 加 納 聖 司

寝転んで遠い初恋たぐり寄す
口下手でも真実ついに生きてくる
門前に来て涼風横を向く

宿毛市 瀬 田 美 知

三度目の恋でようやくゴールイン
行ないすまして女の匂い消しきれず
腑におちぬ顔が並んで月を見る

大阪市 西 本 保 夫

クーポンの老母にまんまと席とられ
のんびりとした事故があり田舎道
有線で呼出す人は山の上

神戸市 横 山 孜 孝

捨てた恋未練の瞳へ赤とんぼ
アベックの影長々と肩を寄せ
仲人はムードつくって席を立ち

大阪市 島 野 大 吉

大名と土分けあうも高山
海の子が山のプールで夏休み
出世して耳にたばこをまだ挟み

島根県 志 賀 美 栄

餌一つ奪ってすずめの仲間割れ
風鈴の音色が冴える新家庭
月の石届けば月の謎がふえ

大阪市 石 賀 文 子

盆くれば思い出せよと蟬の声
玉の汗飲んだ麦茶の肩がわり
体重を始めて知った足の怪我

羽曳野市 飯 田 一 治

どん底に暮すも四季の花があり
夕涼み頭にひびく救急車
現実には花よりだんご娘は嫁ぐ

貝塚市 行 天 千 代

女性上位女三界に家有りて

釣るまでの辛抱高い服も買い

見えすいたうそと知りつつ貸してやり

八尾市 高 杉 千 歩

トンボメガネ恋の愛のと炎天下

サングラス重なり合うて反戦歌

猛犬も尾をふる仲よ往き帰り

河内長野市 井 上 喜 醉

ビヤホール無口な友がよく喋り

点と線つないで噂ひろげられ

貯金箱使うプランは先に立ち

富田林市 木 村 弥 栄 子

ピリオド打った手紙の灰にふれ

燃えさかる太陽へひまわりもてあまし

同業者油断も隙もない目つき

島根県 梶 み どり

姉いもと異る夢に彩られ

七夕のロマンアポロにさらわれる

小商小さな夢を積みかさね

京都市 明 嘉 彦

空港の椅子に和服の似合う人

青空に寝転んでいるほどの幸

義理という字がのしかかる判を押し

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

七円のハガキで人をよびつける

注射して も少し娑婆で苦しませ

殻閉じて貝にしばしの安堵あり

今治市 古 野 伶 人

歩道橋ドキリとさせてミニ降りる

ビキニ型臍も自慢の種になり

御憫察下され度しと筆の先

今治市 原 田 輝 親

そそくさと立つに煙草をねじつけて

四捨五入すればあなたも処女の内

老体をつくづくと見る屋の風呂

鳥取県 両 川 洋 々

子が一人出来てもミニをはきたがり

同じ餌付けても釣る人釣れぬ人

蟬の声うるさがられている暑さ

大阪府 松 岡 茶 々 坊

叱られて亡き父母偲ぶ不仕合せ

忍ぶれば物価ますます高くなり

物分りよいご主人で二号持ち

岐阜市 市 川 鱗 魚

水鉄砲母の素足をまた濡らし

アポロどうあろと祖母にはお月様

八尾市 香 川 醉 々

風鈴が呼び合っている団地です

水につくような土地でも手が出ない

大阪市 河 原 林 比 呂 路

風吹けば赤い造花も散りたかろ

横顔に妥協する気を見せはじめ

倉敷市 竹 内 翁 童

退職を覚悟の意見はよくとおり

さよならといってからが長い母

八幡浜市 別 宮 す き

初孫の歩巾にあわす市場籠

そろばんをきれいにはじく指に惚れ

大田市 藤 田 軒 太 楼

新聞の包みに母の愛を知り

この人を姉と呼ぶ日の近うなり

羽咋市 三 宅 ろ 亭

若返える積りの体操ままならず

孫相手長い休みはもう懲りた

守口市 岸 本 豊 平 次

日曜大工アイスクリームに子が走り

子と行けば童謡になる秋の空

諫早市 原 田 明 春

横向いて顔は妥協せぬつもり

ソッポ向く顔は他人という仕事

鳥取市 稲 村 光 枝

舞人形作れば夏負け遠く去り

遠慮せず掛ければ軋む涼み台

京都府 福 村 飛 龍

二階から大文字見られる京に住み

ふみ切りへ一足違い上下来る

河内長野市 小 川 耕 人

書き出しは裸一貫立志伝

亡き人に嫌い抜かれた通夜の客

泉佐野市 大 工 チ ヨ

打水に植木も夏を蘇り

飾れない錦で故郷を遠ざかり

和歌山市 仮 家 和 美

大草原吹かれつづけの蝶の昼

雨はげし咲いたばかりのくちなしに

新潟県 高 野 不 二

六法全書我に味方をせぬ不運

観光のここは居眠りするコース

岡山県 武 元 柳 子

夏草は茂り空缶ころぶまま

いやがる子にかまわずたたく天瓜粉

寝屋川市 福 富 隆 子

アルバイトへ牛乳二本とってやり

内職の疲れはげます風が来る

和歌山市 吉 野 富 子

恩きせるつもりでないのに誤解され

金出来てから戸締を気にしだし

愛媛県 磴 本 満 子

満開の造花へ蝶も舞わせたし

過ぎし日にロマンのあった博多帯

和歌山県 加 納 花 秀

かたひざをのり出し話に乗って来た

海水浴行ききに精神すりへらし

和歌山県 ふきあげ 虎 城

オンザロック恋は重ねる度に濃く

あやつらる女と見えぬイヤリング

熊本市 高 野 宵 草

桃の皮むく時処女の肌思う

救急車命一つを乗せて飛び

岡山県 山 田 止 水

取り引きへ火花がしばし間を置かせ

釣銭があつて駅弁売って呉れ

尼崎市 中 谷 利 美

落ちついているのは聞いてない証拠

ワイシャツを咬んだチャックをもて余し

米子市 増 田 竹 馬

母の座をめぐりママゴト拗ねている

夏やせの金魚をすくうキャシャな指

大阪市 有 信 新之助

いい柄の風呂敷行方不明なり

都々逸を上手に唄うて座が白け

竹原市 時 広 一 路

何となく判る気がして賛成し

善人は善人らしく考える

羽曳野市 麻 野 幽 玄

九死一生人生観も変えさせる

デモ隊と別の怒りの石を持ち

大洲市 堀 内 暁 風

馬鹿になるコツも覚えた処世術

大臣のマイナスだった車中談

今治市 真 山 国 彦

見るに耐えぬ顔でホステス御出勤

ふるさとの海を汚して工場建て

岡山市 谷 森 和 風

イチゴ狩もとを取るほど食べてくる

見るだけの客へ冷たい目を注ぎ

東大阪市 落 合 思 月

高望みして三十もいつかすぎ
別々の心で気まずい膳につき

仙台市 川 村 映 輝

恩給があるから再就職もでき
飲む金はあなたまかせで又誘い

鳥取市 近 藤 秋 星

朝顔の紫はよし露に濡れ
無職とは哀しいことを書かせられ

鳥取市 夏 目 葉 舟

マイハウス無いのがマイカー買う準備
かけがえのない子で葉頼り切り

鳥取市 藤 本 佳 女

かぐや姫の素肌をテレビが写し出し
足跡を月へ残したい男

京都市 藤 本 征 山

一年も臥ていて長命まだ信じ
パトロール危機をすくってさつと去り

鳥取県 藤 泰 嗣

写真ではもっと美人であったはず
その内に読む気の全集皆揃い

豊岡市 不 二 本 和 久

浄土には行けそうもなし生るとし
美人ではないが水着の線に惚れ

米子市 源 氏 勝 久
うるさ型だから代表やらせとく
俺の座が浄土にあると信じ寄附

鳥取市 藤 本 恵 子
習字より落書の文字はめられた
サロンパス父母おんなじとがこり

鳥取市 河 口 忠 志
党政が庶民の暮しへ遠ざかり
指切りの孫が日曜やって来る

鳥取市 山 本 珂 也 女
鼻風邪をいたわりおうて置く愛話器
朝顔の明日咲く花の数を読み

高槻市 山 田 ス ミ 子
考えが互に違う娘に育ち
アイロンが今日のデートへ素直なり

大阪市 田 中 多 幸
久しぶり会うて達者の手を握る
抜け道があるとも知らず調子づき

大阪市 鈴 木 生 仏
世の中が嫌になったり良かったり
同じ酒飲んで泣く者笑う者

大阪市 松 岡 進
足音に気づかれぬよう朝帰り

ぬけだして行くから来いと目で知らせ

大阪市 今 井 隼 人

目は眼鏡齒は入齒だがまだ達者

性格が合わない事にして別れ

嫁のあら大きく見える眼鏡なり

人並に暮す気ゆかた買うてみる

大阪市 半 田 夏 生

先斗町舞妓の昼はミニ姿

ウインクで気持通じる仲となり

島根県 中 島 英 子

ステテコが見えてノレンをくぐり兼ね

殿様の紋が銘菓に残る町

針仕事孫の眼借りる年になり

鳥取市 有 田 鹿 の 子

コケシさん二人仲よく共の木で

ロープウェー眺め束の間下車時間

暑さには強い自信も齢に負け

大阪市 岡 本 ま さ ひ ろ

一杯の酒が和解の仲にたち

遠くから写してくれと月はい

青一色カンナの花が芽えがえり

泉佐野市 大 工 静 子

チョッピリは妬心も刻む胡瓜もみ

胎教を其のまま受けた子にそたち

暑さには強い自信も齢に負け

愛媛県 西 田 富 士 夫

一杯の酒が和解の仲にたち

口なめて各党御馳走の一栗待ち

暑さには強い自信も齢に負け

京都市 丹 羽 英 二

一杯の酒が和解の仲にたち

さみどりの茶畑かおる宇治の里

暑さには強い自信も齢に負け

普通寺市 伊 藤 歌 子

暑さには強い自信も齢に負け

ねころんで野球を楽しむありがたさ

暑さには強い自信も齢に負け

鳥取市 あがたよしひろ

暑さには強い自信も齢に負け

鳥取市 谷 尾 透 風

暑さには強い自信も齢に負け

鳥取市 藤 本 鎮 也

大阪市 田 治 一 登

大阪市 大 西 為 二

大阪市 村 島 秀 蔵

大阪市 吉 野 志 津

大阪市 木 村 濁 水

大阪市 木 村 久 子

大阪市 斎 藤 三 十 四

大阪市 花 田 繁 子

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

大阪市 休 庭 一 休

川柳徳川記

(八)

富士野鞍馬

大久保彦左衛門

大久保彦左衛門忠教は、永禄三年（一五六〇）庚申、大久保忠員の八男として生れ、兄忠世とともに徳川家康に仕え、天正三年（一五七五）十六才で、武田信実の守る嵩の巣山の砦攻撃に殊勲をたて家康の旗本となり、以後十数度に及ぶ出陣で功をたてたのである。

藤つるがからみ嵩の巣おつことし（三三三）
お扇子の訝え嵩の巣を打落し（二三八）
と川柳に詠まれ、上り藤が大久保の紋であった。お扇子は家康の馬印である。

上り藤おもへば無理な紋所

（武一七九）（三八二）（五四一〇）

御忠節大樹にからむ上り藤

（八三三）

大久保の紋はそれから藤になり（一一四七）
とその紋が詠まれている。大樹は家康をいう。

慶長二十年（一六一五）大阪夏の陣には、真田幸村に追われ、家康と共に枚方の干鯛舟に隠れて危難を免れた。

主従も伏見で舟の一夜ずし（一二三）
こうして始終家康に扈從して二人で潜伏していた時、彦左衛門は突然家康の翠丸をつかんでみて、それが垂れていたもので、その胆勇に感じ「金玉の論」を吐いたという話がある。それを川柳はまたおもしろく詠んでいる。

大久保も隣をにぎる穩かさ

（六六〇）

握つた二分金御治世の元手也

（九二一）

寅の金玉つかんでは稀な忠

（八五九）

翠丸をつりかたにする彦左衛門

（三八二）

さん玉もたらりと伸る時津風

（五六三）

大久保は君の御果報さぐり当

（四九三）

女ならそれが手になる彦左衛門

（七二九）

金玉の論を大久保申上げ

（五一二〇）

大久保へ手を洗へとは御運強

（五六二八）

彦左手を洗いませいと御笑ひ

（八三九）

握つても欲気の無い彦左衛門（二〇三七）
こうして家康・秀忠・家光と三代に忠勤したので、

三代の御孫へ彦の御忠節（二七一）
御忠節御孫へ彦の御三代（二三七五）
と詠まれている。その間氣儘奇行で通っていた。城中で杖を許され、

柳営へ御免の杖も古来稀

（八三三）

また駕で登城を禁じられていた時、大鹽に乗って登城したという有名な話もある。

其頃の下乗の中に大鹽

（一三八八）

と川柳に詠まれている。

家光がある日、彦左衛門をねぎらうつもりで、鶴のあつものを馳走した。ところがこのあつものには、鶴の肉はほとんどなく、小松菜ばかりであったので、彦左衛門は翌日、鶴を献上と称して、小松菜を家光の前へ持っていた。という話もあり、

鶴を初手盛過たので青くなり

（九〇四）

彦左どのつる菜の種を蒔初め

（二〇九一三）

小松菜を千把程買ふ彦左衛門

（四〇三四）

我儘な鶴は畠のものがたり

（四五二二）

鶴と号してうくひすを献上し

（九二七）

鶴に小便かけさせる彦左衛門

（一五〇一三）

小松菜を大久保千代のまじなり

（二〇一六）

彦左老耄せられよそれは菜じや

（一六七二二）

葉斗りながらこの鶴と彦左衛門

（七二二）

大久保の鶴飼附は小まつ川

（七二二四）

と多くの川柳がある。そして、

孫君の御代まで彦はだをいひ（九六一〇）
と詠まれ、彦左衛門は、戦国時代の生き残りの武人として長命し、徳川三代に仕え、無欲恬淡、勤儉、多くの奇行、逸話を残して、寛永十六年（一六三九）八十才で死んだ。

秀句鑑賞

…前月号から…

清水白柳

笑ろてみたとてひとりぼっちに交りなし

小島 蘭 幸

命がけの恋がしてみたい、何か世間の人がアツというようなことをしてみたい、そんな楽しい想像をしていた作者がふつと吾れにかえたのは矢張り交りばえもしない自分の部屋の机の前だった。苦笑いイヤそうではない声を出して笑って見たがソラゾラしいひびきでしかなかった。併し心のうちの豊かさに救われているのは作者だけではない。

院長回診慌てて拭いたり着替えた

酒田 清子

作者が大阪市立桃山市民病院に入院されてからも何年になるのだろうか。辛抱強い闘病生活の中で作句活動は作者の芯の強さを物語っていると思う。北川春果さんがこの病院の院長として就任されてからも何カ月か経つ。この句はその春果さんの回診のときを詠んだものと思われるが、そのときの模様をまた句にして見せてほしいと思う。元氣なタ

ツチでね。

路上駐車うちの入口どこかいな

森本 法泉子

商店街に近い住宅地の路上は大なり小なりこうした被害を受けている。駐車禁止と暴で書いた札がブラ下つていようとそんな事にかまっていれば車から下りて用が足せない。この現象は政治の貧困なのか経済の高度成長のヒズミなのかは、わたしには判らない。

寝転ろんでみて百畳はありまん

遠山 可住

団体旅行の下見に來たのか、それとも先発で來た人達なのか大広間の宴会場のことだろうと思う。舞台はついているし縁側からの見晴らしも申し分がない。これで料理さえよければ満点なのだがというところ。

ほれるよなミニはいないねミナミキタ

高杉 千歩

ミナミとキタといえは大阪の代表的な盛り

色紙短冊
書画用品

大坂市東区

丹生堂

モウセニ・セニ

場（こんな古くさい感じではないが）であるそのミナミとキタには、銀座や新宿から直輸入のモードで歩きまわる人種があるけれども少しも身についていない。本当のファッションというものはその人の知性から出てかがやくものなのである。

骨壺の中に隠そうかと思ひ

有働 芳仙

隠そうとしたものはどんなものなのかは、作者しか知っていないが、税務署に見られては困る書類や男のへそくりは仏壇のどこにかくしたりすることがある。骨壺の中へでも這入るものはダイヤの指輪だったのだろうか

それとも……と想像をたくましくするのも面白いと思う。

絆まだ切れず符箋は夫の手

ふきあげ 虎城

性格不一致で離婚寸前の別居生活をしている妻へ来た手紙が夫の字で符箋がついて配達されてきたという句意なのだと思った。その妻が夫の字を見て何を感じたであろうか。夫婦というもののつながり、それは神のみが知ることである。片付けられないものを持っているように思えてならない。

人並の病気が錠剤もろただけ

横田 放人

念入りの診察をしてくれたのだが、薬をもらってみたら銀紙に包んだ錠剤だけだったので拍子抜けした顔が目に見えるようだ。せめて粉薬でもくれたらよさそうなのに既製品の錠剤だけでは俺の病氣もレディメイドなのかと少々はがっかりしているところだ。

芸術の弥次馬として京が好き

阿万 万 的

国宝、重要文化財、人間国宝と京都は芸術の都である。庭園にしても、それ売り物に料理を出してくれる処がいくつもある。花より団子で一杯飲めるのがうれしくて名園観賞に出かける不心得者が案外多い。それが芸術

の弥次馬なのかどうかは知らないが、私は飲めないが京都へ出かけるのは好きである。

本名の手紙は緑なことで来す

不二本 和久

雅号の手紙は毎日のように来るが、本名のは年に二三回しか来ない。来るのは役場からの納税通知書か知人の死亡通知ぐらいのものである他所へ嫁つけた娘なんか心得たもので私宛のものは全部雅号でよこす。何んだか私のことを詠んでもらったようでありがたい。

米価据置き 神かけてただ凶作を祈るのみ

河原 みのる

田植える勿体なくも豚の餌

福井 野迷路

史上最高の豊作というタイトルがここ三年程毎年のように使われていて、以前の我々なら神の恵みに感謝せねばならないのであるが食費法というものがあつたために農家は米価のことで悩み、消費者はマズイ米を食わされる破目になるのである。生産者が凶作を祈るなどとは五穀の神に申訳のない話だが現実こんな気持ちにさせる農政のあり方に問題があるそうである。古米、古々米、こんな活字はいままで余り目につかなかつたが此頃はイヤに目につく。その古米が豚の餌になるとは五穀の神さまも泣いて居られるだろう。

亡妻への便り

天国に5DKぐらい借りて置く

小川 静観堂

蓮のうてな半座をあげて待っているというは昔のこと、今の天国は日本と同じように2DKぐらいの鉄筋建になっているのかも知れない、と、そんなことを考えながら、いつの間にか寝こんでしまったようである。それは亡き妻への深い想い出につながっているからであろう。

秋田実主宰・不二田一三夫編集

「漫才」

美術カラー表紙ノ
定価百円送料六円

発行所

大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪(七一八)三二一八

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-114
夜間 06 4400-8

お月様の兎

東野 大 八

「世の中には、ばかな人間がいくさつて、お月様をけがしよつた。おかげで浜の漁師もおおまごつきじゃ。さっぱりむかし通りの気象観測ができなくなつてしまつた」

笠岡の沖の六島という小さい島の老網元はそういつてツバを吐いた。

「お月様の顔色が妙な風になつてしまつた。むかしながらのムクな顔つきが、急にイヤらしいやうなつて、まるで新婚旅行からもってきた娘の顔付に似ておる」

ここで笑うはずの顔が笑わない。私はとまどつた思いで面をふせた。

「お月様には、もう兎はおらんのじゃ」傍らのお婆さんもむつとりとそれだけを独り言して、舟虫の散る浜の石畳できびすを返した。この話は、この八月、瀬戸の海の島の旅での、偽らざる私の体験である。

「アポロ十一号は、月の世にいう兎の形を

したその耳の内側のつけ根のところへ着陸した」

ヒューストン発の記事にそうある。

インドの仏典にある伝説には、兎は前世はお釈迦様であつたと書いてある。

あるとき因陀羅というエライ坊さんが、乞食の姿である森に降りていかれ、食を求められた。森のけものたちは、好人物？ぞろいな連中なので、八方から獲物をあつめてきたが兎だけは何も持たずにもどつてきた。そして黙つて火をたきはじめ、もえさかると自らそこに身を投じていった。

「おじいさん、私は他の者を殺してまで、自分の責を果たそうとは思いません。私の肉でがまんして下さい」

因陀羅は、求められれば身を犠牲にして願ひみない兎の行動に感激し、急いで火中から兎を助け出し、その徳を讃え、天に連れて行

き、月の中に住まわせた。

このインドの伝説を、唐の玄奘は、その「西国伝」でつぎのように翻案した。

「過去において、兎の行は菩薩の行であつた。天帝はこれを試そうと考え、あるときその肉を求められた。すると兎はすぐさま身を火中に捨てた。天帝はこれを憐れみ、その焦げた肉をとつて月の中に置かしめた」

月は梵語でシャシンというが、これは兎の印という意義である。梵書によると、兎のことを釈迦という。シャシンが日本の捨身に通じたのも興味深い。インドから中国へ、そして日本へ、月への東洋感覚は期せずして見事な共通点をつくりあげたわけである。

ところが面白いのは、西洋の古典では、月の斑点は兎どころではない。それは神々の休日にもかかわらず働く人間を罰して月に追ひやつたことになり、月はまるで懲戒所である。いふなればその姿は荆棘の悪漢と見立て兎どころの話ではない。

この東西の月の斑点のイメージを思いくらべ愉快なのはカチカチ山である。この童話では性悪の狸がマキを背負つて歩くのを、善玉の兎が火をつける図だ。このお話はその狸は泥舟に乗つて水の中で落ちるのだが、今様かちかち山では、その泥の舟は月へ行つてしまつた。アポロ十一号である。六島で耳にしたはじめの老漁夫のぐちは、もしかすると沈む

はずの泥舟が沈まず月へ行つたことの憤りかもしれない。

もつとも兎とて、人？の好いものばかりはいない。因幡の白兎は、ワニを欺して赤裸にむかれる。大黒様が憐れんでお訓しになる話がある。これは原典は、どうやら東南アジアの反仏徒の間から出た仏教への風刺だという説もあるが明確ではない。

お月様といえ、日本ではウサギのモチつきがよく知られている。木のウスに両つきのキネの絵姿がそれである。

唐の国に娶という若者がいた。旧友を訪ねてさる邑へ行つたが、その旅の船中で絶世の美女に出あう。下男にその名と住所を探るよう命じたが、美女は行方知れずとなる。がっかりして帰國の途中、とある町外れでのがとかわいたので、近くの家に寄り水を求めたところ、すごい美少女が出てきて水を捧げた。氣もそぞろになった彼は、居わす老婆に、この少女を妻にしたいと申出たところ

「娘も年ごろ、そろそろ嫁にと思つていましたと云ふ、ある日一人の仙人が見えられ、一袋の仙菓をとり出され、これは上仙への秘薬の素だが、玉の白と玉のキネがなければ作れない、と申されました。貴方がこの娘をご所望なら、その玉のウスとキネを工面して頂きたい、さすればさし上げましょう」と

といった。その老婆の話に、彼は死者狂い

で八方を捜し求め、やっと数年をへてくだんのウスとキネを手にしたわけだ。老婆は大喜びで早速に仙菓の製造にかかり、百日間でつきあげた。そのとたんに彼と少女は月宮にきていて、よくみると少女は兎になっていた。愕く彼に玉の様な声が降つた。みると、その美女こそ、かつて船中でみたあの美人であった。彼はやがて月宮で修業して上仙となり、船中の美女を妻として月の主となった。これは中国の古本「列仙伝」「瑞兔奇聞」の二書に載っている話で、杜子美（杜甫）も「搗薬長生」とその神仙思想を賞めているがこの神仙思想だけは日本の体質にあわず、その餅つきだけが伝つた。

兎のもちつきには、キネの相手のこねどりにひきがえることになっている。中国では、月は女性のシンボルで「月は太陰の精なり、刑罰威権を司り、后妃の象なり。月中に兎とひきがえる」とあり、陰精の中、積つて獸象となす。兎は陰の類にして、その数は偶なり（民用晴雨便覧）とある。「神農書」によると、ひきがえるも兎もともに吐生動物であるところから、モチつきの仲間になされたわけだが、兎とひきがえるはともに、雄なくして子を作るといふ点も理由だとある。兎はともかくひきがえるの雌雄の間の猛烈さは定評がある。太古の人間とてそこまで見極めなかったのはウカツであった。抱朴子はひきが

えるを評して「千歳すれば頭に角あり、腹子丹書あり名付けて肉芝という。能く山精を食らう、人得てこれを食らう、仙術家取つて用ゆべし、以て霧を起し、雨を祈り、自ら縛を解く」とある。ひきがえるを靈物と見たてているわけだが、ひきがえるはやくぎの世界ではこの道の神様である。すなはち抱朴子の効能を裏づけて、兎の偶数に対し、ひきがえるの奇をもつて、そこに丁半を作り出した。

とにかく月に兎をおき、女性の象徴としたわけだが、これでは易占巫卜の陰陽の天則はなりたたないと、陽物の男性代りにひきがえるをあてがつた。もつとまじなしるものをあてがつてくれればよきなものだが、古代中国は神話の敵は詩人とみていた。なぜならそれを歌頌し記敘する際、詩人はつねに粉飾してやまないからである。とにかく、月世界では男性はこねどりのひきがえるにすぎず、あくまで女性上位時代であつたわけだが、こんどアポロ十一号で二個の男性が舞い込んだわけだ、六島の漁夫ではないがその顔色が「妙な風」にかわるのもムリはない。

川柳塔社賛助会員追加

木 山 遠 二

チャンス

木山遠二選

チャンスをつとめ貧乏神へさうなら
最後ならぬチャンスへ見栄を捨て
密談へチャンスとばかりお茶を出し
一か八男度胸と云うチャンス
ニツタリとチャンスがうち向て来た
チャンスとは思ふと手許に金が無し
一徹が出世のチャンス又逃がし
このチャンス初心は伏目で居る
青い鳥二人でつかむ日へはげみ
無死満王長島と云う打順
秀才ではないがチャンスでの上り
この襖一つ開ければ待つチャンス
打明けるチャンス逸した別れ道
よくする舌がチャンスをつい逃がし
夕立のチャンスを傘屋待ちかまえ
チャンスつかみそこねた我を慰め
チャンスではなかつた結果が出
新調の服ヘードトのチャンス待つ
易学のチャンスが未だ訪れず
友情がチャンス与える席を立ち

善人の弱きチャンスに付けこめず
又とないチャンス逃して落ち目
逆転のチャンスへ呼吸整える
豪商のチャンス掴んだ屋台店
またとないチャンスとなつた俄雨
ともかくもチャンス来るを待つ
復縁のチャンス男が頭を下げる
ゆつくりと構えチャンスを驚嘆
思い出の中でチャンスの数を読み
チャンスだと友情恋をけしかける
定年退職チャンスがあれば働く気
チャンスとて無くとも今の儘でも
チャンス逃して大衆の中の僕
仲直りさせるチャンスが子から湧き
ジャンケンポンチャンスと為る負け
チャンス逃してオールドミスと
気の早い男チャンスを直ぐ掴み
このチャンス逃せば損と買わさ
慎重が過ぎてチャンスを又逃し
嫁さおくれチャンスなかつた訳でも
スクイズのチャンスに打つた凡フライ
絶好のチャンスと株をつかまされ

一生に三度のチャンス 逃す馬鹿 瑞枝
あの時もチャンスであつたと思ひ 古方
折角のチャンスに心臓ついて来ず 柳子
人 地 天
本宅
西辻竹青選
本宅へ寝る為だけに帰つて来 不二
本宅へ折り目正した御挨拶 静歩
本宅へ代理で遅い帰り告げ 宵明
本宅では良いパパ後添い入られず 章雅
本宅を撮つて戻つた聞き合わせ 扇水
本宅の金庫の鍵は妻がもち 無閑
本宅へおそろのおそろと同級生 隆子
出戻りが居て本宅をふりまわし 鱈魚
本宅は椅子でさつさと飯を食ひ 新之助
本宅が近過ぎ雑用言いつかり 道雄
出店出店と本宅へ落ちつけず 正朗
いい話らし本宅へ招かれる 暁明
本宅の電話に秘書の如才なく 花秀
本宅の女中のんびり閑つぶし 保夫

二号邸本宅にして刷る名刷
本宅にとり残されとる老夫婦
妻の座が本宅ゆるがぬものにする
本宅は亭主関白通しおり
過疎の里本宅だけがデンとあり
本宅と云うには粗末な部長邸
旧地主本宅の広さまであまし
本宅は空気のうまいとこへ建て
本宅の格式泣き事言えぬ寄附
本宅も事務所も同じ家内業
本宅の威厳集金待たされる
本宅の客間で就職手を廻し
本宅の権威崩さぬつけ届け
下界どうあらうと本宅の鬼瓦
本宅の黒く光つた床柱
御先祖の手前本宅手放せず
本宅の畳は減らぬまま古び
御先祖の遺産で本宅支えられ

佳

人

地

夏休み本宅幼稚園ほど帰り
本宅も別荘もないまだ借家
本宅へ帰れば静かにすず父
本宅へ名士の余生記者が訪い
わが田舎本宅さんが顔きかせ
本宅は小さく住んで店栄え
本宅の奥様でさえ木綿足袋

歌 手

山内静水選

天
家族のいる方が本宅らしいとか
古 方

名歌手になつて用心棒がつき
タレントに歌手の演技まで買われ
当節の歌手へ明治があきれ果て
往年の歌手返り咲き皺がない
歌手ヒゲも伸びイメージチェンジも
まだ歌手の夢すてていずのど自慢
御三家は落目ハスキな歌手が売れ
リバイバル出て歌手のどの貌も
じみな服着て故郷の歌まつり
恋歌う歌手のまつ毛が濡れている
メンデルを無視して歌手になりたがり
歌手老いて歌は昔のままの歌
思い出の歌手の年をほめてはる
風邪気味の声で売出す波にのり
誠実さ買われた歌手にある人気
好き好きの歌手にチャンネルも
人気歌手 無精髭まではやらせる
もまねで歌手がハワイへ旅行も
恵 子

五 客

人

地

天

軸

元歌手の議員候補が忘れられ
三ツ鐘本気に歌手になるつもり
豆歌手へ子供らしきのない批判
一曲のヒットで歌手の名が知られ
掛小屋に一字違いの歌手が来る
マスコミを泳いだ歌手が勝ち残り
きびしさを歌いまくる歌手は泣き
純情の歌手もう週刊誌の種にされ
しびれさす 歌手あどけない 素顔
ちゃん付で呼ばれ歌手が髪を染め
投げキッスふんだんにと歌手退場
人気歌手今日はカツラで唄わされ
子供のうな歌手にお世辞を司会
ハイミスを森進一がしびれさせ
長髪の歌手が娘を狂わせる
子沢山歌手に仕立てる手もあつた
婆ちゃんがうんと言わぬ歌手志望
天二物与えて歌手の器量よし
カムバック歌手の人氣はまだ失
絶讃を浴びて明日が恐らい歌手
売り込みの映画で歌手の運不運
客席で唄い廻つて人気歌手
歌手もとの流しに自由とり戻す

初歩教室

——題「酒」——

本田 恵二朗

作句上達へのアドバイスとして、先輩は、多読多作という名言を提供してくれた。読んで字の如しであるが、多読とは、鑑賞眼を養えということだと、私は解釈している。

優れた書画・音楽・彫刻などを、数多く視聴するなれば、その目も耳も、そしてまた脳細胞も、高度に成長するであらうし、反面拙劣なものの欠点を見抜く力も、同時に、養われるであらう。鑑賞眼を養うことは、即ち作句力上達への道である。批評と鑑賞とは、同一のものでないことは、言うまでもないが、私は、鑑賞ということの方が、自らにプラスする点が多いと信じている。

教室の諸兄姉が、こぞって、鑑賞眼育成に、努められることをひたすら願って止まない。そこで、スペースの許す限り、皆さんの熱吟を鑑賞しよう。

花嫁の父には淋しい酒である 弘 生
体験が無くては、句意がピンとこないかも

知れないが、嫁かせる日の親の心情は、その母よりも、父の方が、切実に感じるものと、古来言われている。私自身も、この心情を痛いほど味った体験を持ちあわせている。

どつちみち蔵は建たへん飲まな損 濁 水
いさぎよく割り切ったものだ。これは酒好きの気持ちだし、諦めや自嘲なども、ちよつぱり交ざっていて、泣き笑いを感ぜさせる。
同じ酒のんで泣く奴笑う奴 生 仏
三上戸の生態を、つぶさに観察した経験を私は持っているが、全く面白い景色である。この句に、共感することしきりである。

沈んでも浮いても男酒と居る 千代
女性である句主が酒好き男の生体を、ずばりと言つてのけたところ、中々痛快である。
出采心男に酒がある限り 利 美

男と酒の関連を句材にとらえた中での秀逸だよ。叙法もすらすらと。この調子だな。
盃を交すたんびにメッキ削げ 初 甫

体験があるだけに、ピンとくるよ。でもこんな罪がないし、微笑しい景色だな。

升でぐつと吞ませた明治を憶う宵 静観堂
句主はこんな時代をも、ご存知という、貴重な年輪を持つておられるのだが、晩酌のひととき、それをなつかしく思い出すことは、心にゆとりがある証拠だよ。

ドライブの命百薬の長が取り 泥子
交通戦争などという新語が、もう新語でなくなつてもたような時代である。この句の通りが、三面へにぎやか過ぎて、人力車時代がなつかしまれるよ。

酒に罪させてしくじり棚に上げ はぎの
こでも女性句主が、酒男を、真綿で諦め上げて、つりし上げよつた。苦笑させるな。
妻の留守待つてましたと昼の酒 繁子
ご亭主は、女房にバレーしていると、ご存知ないらしいが、その妻である句主は、まさきり知つてござるからこわいよ。

のむ仕草さすが真打ちおいしそう 新之助
落語家の真打ちになるには、苦勞の年期がなくては、安易になれるものではなからう。
のむ仕草一つにも、年期が入っている。川柳の道にも、同様のことが言えそうだな。

三本目妻のごきげん取りそこね 秀村
いやはやお気の毒さまである。とりそこねたご亭主の顔を想像してみると、身につまされる御仁が、そこいらにいそうに思えるよ。

上役へ不満こぼした不覚酒

志津

こいつは、まぎれもない不覚だ。あしたの朝お会いした時の、ばつの悪さへ、ご同情申上げねばなるまい。

夏バテの食はへつてもへらぬ酒

芳

せめて酒のへらないところが慰めである。これもへつたら、取柄がないよ。へちまが腐ったまんまぶらさがったみたいになるよ。

酒好きが玉に傷だが目をつむる

克枝

理想の男性像は、健康であって、天職へフアイトがある男のことだと、私は言う。顔姿は二の次だよ。婿探しの基準にして欲しい。この句の場合、玉とは、健康と天職へのフアイトとが完全に両立していることである。だから、酒好きという点は大目に見てやれよ。さて、スペースが気になりましたので、皆んなの熱吟の大名行列を描き出すことにする。

返盃へ紅を浮かせた目がすずし

李朋

お色気の欲しいお酒は高うつき

雅方

酒は佳し神輿の足をはずませる

三十四

うれしさは母も酔つてる喜寿の膳

誓二

マイカーを持たぬ気楽な酒の味

止水

キャバレーの酒には酔わず花に酔い

弥栄子

座の白けとりもつように酒が出る

久子

お銚子にきげんとられて目を細め

多幸

喜びのあとの虚しさ一人酌む

虎城

一合の酒に言わせた胸のうち

すき

老骨に鞭打つようにぐつと乾し
開運のきざし見つけた酒の味
日本酒で絡み洋酒でまた絡み
そのせつはなどと笑くばを添えて酌ぎ

露芳
美代
洋々

粒うにの底をついて一人酌む

軒太楼

人までも飲んでしまえと酒が言い

比呂路

酒癖は悪いがおどる癖を持ち

一登

酒臭い唄がこぼれる縄のれん

為二

酒ゆえのしくじり数え切れず老い

全喜知

それぞれの癖まる出しの縄のれん

茂美

晩酌一本保健康だとぬかしたり

富子

下戸達の盃せめに足取られ

政美

相伴の酒がお客の肩を借り

治

医者替えてみたがやつぱり禁酒せい

梯子酒だんだん家へ近う飲み

綾人

雁首を水屋に突込み盗み酒

隼

ビールなど水に過ぎない日本酒覚

進有

酔い足りて例の如くに出る校歌

行有

一滴も飲むなと慈悲のないお医者

与呂志

妻の留守冷や酒五臓にしみ渡り

保夫

謹厳な顔がほころぶよいお酒

肖二

頂けませんのよが返盃ぐつと乾し

富士

酔うて言う訳じやなかと酔うても

光枝

一本の追加も妻が管理する

愁電子

栄転の舌にとろける灘の味

和風

酔つてないよ酔つてないよと酔つている

酒量もう子らに勝てない齢となり
酔いきげん困った奴が来てこわし
猪古三つでございけんさんの夫です
ライバルも僕も酔えないまま対座
せめてもの親孝行の特級酒
慶彦
瑞枝
大枝
頼次

※

題「涙」 十月二十日締切(十二月号発表)
宛先(〒711) 倉敷市下津井三五二

本田恵二朗

旅行・宴会・リクリエーションの
ことならどんなことでもご相談くだ
さい。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田 4-40-5

TEL 03 (733) 695,1

守口出張所 守口市京阪本通 2-18

三洋電機株式会社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

大 萬 川 柳

「鮎」

入選発表

選 者 清 水 白 柳
 投句総数 五百七十三句
 入 選 五 十 五 句

貝塚 つき子

釣堀で鮎と対話の小半日

大阪 金 三

保養所の退屈鮎釣り見に出かけ

大阪 小松園

跳び出ただけで思案のつかぬ鮎

今治 宵 明

傷心の鮎は釣れても釣れいでも

大洲 曉 明

理科でいる鮎が釣れない父と子と

大阪 形 水

釣堀の鮎は釣られるよう飼われ

東大阪 綾 女

釣れ過ぎた鮎は焼いたり配つたり

笠岡 要 次

鮎つ子が鯉に出世の夢で醒め

堺 千 万 子

土用丑鮎のさし目で我慢する

堺 一 二 三

竿の手前鮎まで買つて持ち帰り

大阪 庸 佑

さて釣つてどうしようもない鮎を釣り

鳥 取 日 満

鮎にさえなめられてゐる今日の竿

倉 敷 素 身 郎

鮎釣りぐらゐに家中自家用車

倉 敷 千 翁

かりそめの夢でも鮎は鯉を追ひ

大阪 弘 生

鮎釣つた川は暗渠の町となり

倉 敷 春 日

何よりも鮎の酢味噌に地酒の香

大阪 章 雅

釣池に鮎買ひ戻される夕あかね

岐阜 鱗 魚

二度跳ねて鮎に畔越す知恵がつき

高 石 好 郎

大物のおかげ鮎池に戻される

八 尾 鬼 遊

鮎ずしのお札捨てたと言わんとく

倉 敷 克 枝

鮎ある日滝へ登つた夢を見る

倉 敷 克 枝

釣りの道極め初心の鮎を見る

岡 山 久 米 雄

年寄りの家出は鮎を釣つただけ

岡 山 久 米 雄

寒鮎が年寄りだけによろこばれ
 池干して村中鮎を配られる

米 子 瑞 枝

大器晩成テスト忘れて鮎を追ひ

運悪い鮎なりバケツ跳ねて死に

倉 敷 恵 二 朗

出稼ぎの父が帰る日鮎を釣る

絵日記が大鯛ほどの鮎を釣り

鮎釣りが鮎に釣られて夕焼ける

大 阪 大 吉

小気味よく大人尻目に鮎が釣れ

間抜け鮎俺の針にも引つかり

新盆を忘れ鮎釣り叱られる

尼 崎 利 美

食い逃げのコツを知つてる池の鮎

一晚は執行猶予される鮎

釣るだけが楽しみの鮎もてあまし

佳 句

堺 一 二 三

鮎で始まり鮎で終つた今の妻

高 槻 静 馬

鮎昼寝したのかウキも動かない

大 阪 繁 子

食べもせず貰い手もない鮎を釣り

公害へ小鮎だまつて死んで見せ

鳥 取 佳 女

釣る鮎猫もいつしよにのぞき込み

人ノ句

堺 素 郎

大掃除鮎など釣りに行きなはれ

地ノ句

富田林 美代

同居する子鮎金魚の藻にかくれ

天ノ句

大坂金 三

釣りあげて口に疵ある子持鮎

大萬川柳四十四年度 第九回

ベストテン (九月現在)

一	瑞枝	一八〇 米子
二	柳志	一七〇 大坂
三	天笑	一六五 堺
四	好郎	一六五 高石
五	文枝	一四〇 倉敷
六	文秋	一三〇 大坂
七	千代	一三〇 米子
八	鱗魚	一二五 岐阜
九	花梢	一二五 富田林
十	小路	一二五 大坂
十一	水客	一二五 大坂
十二	利美	一一五 尼崎
十三	素身郎	一〇五 倉敷
十四	小松園	一〇〇 大坂
十五	慶之助	一〇〇 大坂
十六	阿茶	九五 大坂
十七	弘生	九〇 大坂
十八	久米雄	九〇 岡山
十九	里風	九〇 倉敷

水車氏のお読物

福浦勝晴

九月号・「川柳七章」の中の吉田水車さん「吉川さんの川柳」は非常に貴重な文献で興味深く読ませていただきました。

日本の大衆文学界にさんらんと輝やく一大金字塔を打ち樹てた苦学独行人・文豪大吉川一その吉川英治氏が若年時、川柳を作っていた話はつとに聞いていたが、いったいどんな句を作っていたのだろうか……独り私だけにとどまらず多くの柳人たちが知りたいと思っていたことに相違ない。

吉川英治氏の川柳には、一句一句、真実性がにじみ出ている。そ

二〇	一二三	九〇 堺
二一	形水	九〇 大坂
二二	素郎	九〇 堺
二三	葵水	八五 和歌山
二四	静馬	八五 高槻
二五	眺明	八五 大洲
二六	大吉	八〇 大坂
二七	恵二期	八〇 倉敷

二八	吸江	八〇 藤井寺
二九	秋月	八〇 岡山
	以下略	

昭和四十四年度第十一回

「断絶」 五句以内

締切 十月二十日

第十二回 (四十四年度最終)

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五一六

郵便番号 五九二一

川村好郎

なるべく投句には

川柳塔柳箋

一冊 六五円
送料 三五円

すばらしい
着心地

蝶矢
シャツ



柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼九月に入ると俄然各地の
川柳大会が目白押しに並ん
で壮観である。

▼豊中川柳会主催の市民川
柳大会は九月二十八日(日)
午後一時から蛍ヶ池中町の
中央公民館で開催。本社か
ら戸田古方・正本水客氏が
選者として出席された。

▼第二十五回尼崎市文芸祭
川柳大会は十月十二日(日)
正午から尼崎市公民館で開
催、兼題、柵・鉦・系図・
憂い、各題三句、投句は百
円封入の上、十月五日まで
に尼崎市東大島宮下二一八
米田耕三宛。

▼第四十回文化祭京浜川柳
大会・第四回川柳文化賞贈
呈式は十一月三日(祭)午
前十一時から東京都中央区

新富町の印刷会館で開催。
兼題、上流・広場・缶詰・
真ん中・有難う・疑う・飛
躍・仲よし、投句は百五十
円封入して(十月二十日消
印まで有効)東京都練馬区
練馬四の二三の七、三浦太
郎丸宛。

▼麻生霞乃先生はまだ食養
生がつづき、冷めたいもの
はいけない。刺戟物はよく
ない。アルコールは勿論の
こと、甘い物も遠慮しては
しいとの医師の忠告を守っ
ていますと。

▼第七回三重川柳大会は十
一月九日(日)午後十二時
三十分から伊勢市の伊勢商
工会議所、三階ホールで
開催。講演は三条東洋樹氏
雑詠(各三句五選者別)の

投句締切りは十月十五日、
兼題(各三句別記)は波・
鳥・鯉・舌、投句締切りは
十月二十五日、参加料は雑
詠、兼題別にそれぞれ百円
雑詠は伊勢市大世古町七七
中川黎明庵宛、兼題は伊勢
市古市町一一八野村可通
宛。

▼川柳ひろしま七月号は、
原爆句集きこの雲を特集。
―原爆忌神と人へと風が鳴
り。巨城。

▼第二十三回岩手芸術祭参
加川柳大会は十月十九日
(日)午前十時から盛岡市
大通り岩手教育会館五階で
開催。雑詠、白石朝太郎選
兼題、椅子・家族連れ・朝
・市場占有率・質問、投句
は百円封入の上十月十日ま
でに盛岡市内丸三の七岩手
日報社事業部内芸術祭川柳
大会宛。

▼赤間武史編昭和四十四年
度「北海道文芸鑑」は北海
道の川柳人の作品を網羅、
一部五百円、送料七十五円

札幌市北二一条東三丁目
札幌川柳社へ。

▼札幌市長杯争奪、札幌川
柳社創立十一周年記念兼六
氏古稀祝賀川柳大会は昭和
四十四年十月十二日(日)
北六条西二丁目国鉄クラブ
四階ホールで開催。

▼北村白眼子句集「想い出
(送料共六百円)」が十月上
旬発刊予定である。購読希
望者は早目に函館市青柳町
十八番十一号函館川柳社全
面部へ。

▼佐藤竜山坊氏送別句会(ハ
弓削川柳社)は七月十二日
午後六時から、御建郡建部
町「みずほ荘」で開催。

▼川柳平安誌は九月号をも
って百五十号を迎えたのに
因み、全国柳社主宰者の作

賛助会員追加

本 多 清 人

太 田 良 子

品「華彩百五十句」を特集
本社の中島生々庵主幹も作
品十句を掲載された。

▼自由律川柳「視野」八月
号は二百一十号として発行。
▼川柳しかご誌は本年夏期
号を八月十日に発行された
が、以後休刊となる由。

▼川柳ジャーナル九月号は
各柳社代表の推薦する作家
の作品を特集しているが、
本社からは、清水白柳氏の
筆で、早川清生作品が、掲
載され川柳塔の面目を示し
た。

▼第三回串かつ川柳大会
(呉番傘呉柳会)は十月二
十六日午前十時から呉市本
通十三丁目法眼寺幼稚園で
開催。兼題、ぜいたく・踊
り・線路・学費・沈黙・地

図・ホース・帰る・数字・表紙、各題二句、投句は百円封入して十月二十日まで、に呉市本通四丁目四番二十四号三浦宏方串かつ川柳会宛。

▼備前川柳社八月例会は十七日浜田久米雄居で開催。久米雄氏から、「川村好郎氏に恒例のうどん祭りに来てもらいました。その後の話に花が咲いております」

▼一杯水川柳会（下関市）消夏句会は八月二十四日光明園で開催。中村九呂平氏らから寄せ書を頂戴した。

▼故河相すゝむ氏（元同人）の一周忌川柳句会が甲南ク

ラブで九月八日六時開催。故人の人格をしのび柳友が多く参加した。

▼経営者会報（日本実業出版社）九月号の後記に、東野大八氏の句がのっている。もう腕で抱いて欲しいから妻もまた大八。北支戦線で片腕になった人の句。哀切の情がまことに骨身を刺す。寸鉄殺人の詩。と評にある。なお同誌に大坂形水氏（大阪同人）が「余暇入門」と題して川柳を執筆。

▼企画部に社長の体験邪魔になり形水。

▼岡岡霊眼子氏（諫早市同人）は諫早文化協会の常任

理事に就任された。

▼学園川柳葦の会五周年の集いは十月二十六日午前十時から奈良白藤学園会議室で開催。兼題・えくぼ・鳩・断絶・風・あこがれ・投句十月十五日必着百円同封。宛先、奈良市北市中町六四、森夢児。

▼本多柳志氏（大阪同人）は九月二日信濃の秋をさぐり一茶の旧跡を見学。地理歴史文学古典パスガイド。柳志。

▼山陰川柳大会は九月二十一日開催。特別題吟は「花一ばい」

▼大山雅城氏（東京同人）は「と金」と改号。

▼石曾根民郎氏（しなの川柳社主宰）は八月十八日の中日新聞紙上に「夏の川柳」と題して随筆を掲載された。「父を待つ西瓜半分紙を貼り 盈光」などほえましい句の解説で好評を得られた。

▼本田恵二朗氏（倉敷市同

人）は連日の暑気もものかわれ、故十九平氏の三万句に及ぶ作品から五百句ばかりを選出、句集の編集に没頭八月中旬にようやく印刷所へ廻す段取りとなり、待望の句集が十二月上旬には発行されることになる由。

▼宮地双葉氏（大阪市同人）は九州旅行から帰宅された後、八月十日胃痙攣の発作に悩まされ救急車でドック入り、「ボロ船が又修繕のドック入り」と養生専一にしておられる。

▼竹原の川柳大会は九月七日市民館で二百五十名の参加者を得て盛大に開催されたが大阪から白柳・好郎・小松園・摩太郎・形水・鬼遊・天笑・花梢・美代・千万子・茂美・弥生・葉子・薫風の十四名が前日から広島市内を観光、伯峯・鬼焼両氏の案内で、国民休暇村宿舎、大久野島の「くのしま荘」に一泊、清遊した。

▼不二田一三夫氏は九月十日東京、浅草の寄席街見学。翌十一日秋田実先生と帰阪。原稿の締切に追われ東京の川柳家にも会わず残念だったと。

▼本田恵二朗氏（倉敷市同

人）は連日の暑気もものかわれ、故十九平氏の三万句に及ぶ作品から五百句ばかりを選出、句集の編集に没頭八月中旬にようやく印刷所へ廻す段取りとなり、待望の句集が十二月上旬には発行されることになる由。

▼小島桃路氏（無聖改め宝塚市同人）は九月本社句会から出席、中央で勉強したいと意欲をもちやされている。

▼川端柳子さん（岡山市同人）の住所表示が変更になった。岡山市清輝橋三丁目三の十八。また、今年銀婚式を迎えられるのを祝ってたましま川柳会員の肝入りで十月十九日（日）後楽園

新同人紹介

香川 酔々

浜田 儀一

—好郎・白柳推薦—

本社九月句会

会場 以和貴荘

八日 午後六時

初代川柳忌句会を全国の柳社で催されるのだが、本社も何か意義ある行事をとおもいながら、メイ案が浮かばぬままに今日に至っている。

今月は耳新しい雅号の方々がたくさんご出席いただき、幹事がちよつとマゴついた。宝塚の無聖氏が桃路と改号されたが、夢成氏が出席だったのでハテナ?と一瞬とまどう一とコマがあった。

古方氏の柳話は人間陶冶を真向からのべられたが、新しい作家には路郎先生のこの金言がよくわからなかったようである。云うなれば中級柳話というところか。

白柳氏に叱られるかも知れないが、今月は一大異変が起こった。つまり白柳氏が天位三句をとり、しかもそのうちの一句が月間賞というのである。十数年間句会の記事を書いているが、こんな月は始めてだ。暴言ごめんさい。

(F)

(河井庸佑整理)

出席ー与呂志・天笑・古方・維久子・貞山・白柳・柳宏子・野迷路・新之助・摩太郎・

瓢太・烏荘・綾女・滋雀・形水・文秋・禎三・生々庵・凡吉・藻介・夢成・虎声・酔々・小路・鬼遊・千梢・圭井堂・静馬・静歩・葛城・儀一・万の・百酒・誓二・一三夫・一舟・多久志・大吉・トメ子・好郎・頂留子・水客・つき子・凡九郎・鶴声・花梢・富久一・肖二・金三・季賛・宣介・桃路・小松園・一二三・河産・庸佑・奈良子・いさむ・葉子。

席題「地下鉄」

中尾藻介選

郊外へ出ると地下鉄上走る 形水
地下鉄を出て東西を先ずたずね 小路
くものすのように地下鉄延びてゆき 瓢太
デパートで買えと地下鉄手を結び 摩太郎
地下鉄へもぐらのように走り込み つき子
地下鉄の運賃市民として我慢 富久一
地下鉄はぶつきら棒の乗務員 一三夫
足ふんだままで地下鉄駅に着く 大吉
地下鉄の思わぬ処へ出た出口 柳宏子
シルバカー万国博も近うなり 金三
地下鉄で逆の出口へ出てしまひ 富久一
地下鉄の会話とぎれてひた走る 奈良子
地下鉄が中途半端に開通し 肖二
地下鉄は地獄の下をつつ走り 文秋
地下鉄を出れば地上は雨でした 頂留子
地下鉄のラッシュ二人の手を放し 維久子
時時甲羅干したい地下鉄乗務員 生々庵
地下鉄をあがれば真夏の街があり 瓢太
地下鉄を出る階段で生き返り 綾女
地下鉄で来る割勘の三次会 万の
地下鉄の騒音話くいちがう 花梢

地下鉄に勤めて夏の陽を仰ぎ 滋雀
ふりむくと真昼無人の地下電車 夢成
暗い道の方へ地下鉄出る二人 万の
カーブ切る地下鉄ゆがむ顔多数 河産
地下鉄を出てデパートをついでに見 文秋
地下鉄の出口混でるにわか雨 多久志
地下鉄に人の流れを変えられる 形水
うつぶんを叩く地下鉄の両替機 白柳
地下鉄は北と南を勘違い 烏荘
地下鉄が都会の別な風を切り 生々庵
地下鉄の階段数えたくもなり 圭井堂
地下鉄のきしみ受けとめ疲れた脳 夢成
地下鉄がつくと原っぱ買われた 圭井堂
地下鉄をあがれば旅の顔がある 水客
地下鉄でも一度も来た会社 好郎
地下鉄の窓さえ女無駄にせず 天笑
地下鉄のマイクわからぬままに降り 桃路
地下鉄の窓に映っている仮面 天笑
地下鉄の恋地下鉄でまた別れ 奈良子
地下鉄にもまれるだけのサラリーよ 禎三
地下鉄に乗っても子ども窓に立ち 花梢
地下鉄を出てデパートを歩かされ 富久一
地下鉄を出て地下街で食事する 小松園
地下鉄に小さな野心いつも持ち 藻介

席題「ノイローゼ」 越智禎三選

ノイローゼ同士の恋がはかどらず 天笑
ノイローゼ星の光りが眼にささる 水客
ノイローゼでんねと人の倍も寝る 圭井堂
ほんとうの胃癌になったノイローゼ 好郎
大器晩成ノイローゼと遠く住み 生々庵

蟬の声耳からとれぬノイローゼ
 ノイローゼいたわる母へも勸を立て
 原因は隅に小さくノイローゼ
 神経がやつぱりあってノイローゼ
 ぐどぐどと言ハノイローゼにしく
 外聞はノイローゼと言うておき
 仲人が首をかしげたノイローゼ
 ノイローゼ医者と患者がもめている
 うすのろがまさかと思フノイローゼ
 親親たらず子子たらずしノイローゼ
 ノイローゼですと何やら薬呉れ
 ノイローゼそんな逃げ手の旅に出る
 お茶漬でサラサラ食てノイローゼ
 ノイローゼあざけるような海の色
 ぜいたくやなあとノイローゼへなり
 本当のノイローゼかもしれぬ彼
 宿題が出来ず母子がノイローゼ
 窓のない部屋からノイローゼ出な
 そう言えはそうにも見えノイローゼ
 ノイローゼなどになれない子沢山
 風邪薬ですっかりなおハノイローゼ
 肥えている方の女がノイローゼ
 ノイローゼの男に見えぬ顔をもつ

形水 金三 滋雀 文秋 百柳 静歩 儀馬 静一 静馬 桃路 二三 滋雀 静歩 好郎 千梢 薬介 トメ子 水客 新之助 醉馬 静馬 天笑 楨三

席題「先祖」

川村好郎 選

マンションに先祖の槍の置きどころ
 御先祖の重臣不甲斐ないわし
 先祖から女性上位と言う家風
 この孫にどうやらあった先祖の血
 御先祖は槍一筋という家紋
 海賊を先祖に持っている自慢
 子種まくだけは先祖の真似が出来
 よろめいた訳御先祖聞かされる
 御先祖に顔むけならんとゲバの母
 自叙伝の中に御先祖生きている
 ご先祖に済まぬ継ぎ手のない家業
 ご先祖は何様だろうと今日を生き
 ステレオに先祖の仏だん追い出され
 ご先祖に済まぬと母のつつましい
 御先祖にすまぬ田地を売り急ぎ
 御先祖がどうのこうのと裏住い
 ご先祖をせめての自慢にする落目
 引き合いに先祖が出て叱られる
 口伝によれば先祖も女好き
 過去帳をしみじみと繰る気の弱り
 先祖の地手放し乗りおくれまいと
 御先祖にすまぬがお経長すぎる
 底辺の身もかかさない墓参り

摩天郎 楨三 文秋 古方 奈良子 形水 一舟 静歩 千梢 静歩 形水 瓢太 静馬 花梢 静歩 柳宏子 百酒 醉々 多志 宣介 水客 柳宏子 好郎

兼題「前借り」

西田柳宏子 選

前借りで損したような給料日
 前借りで兎も角手術間に合わせ
 前借りがつづき給料これっぽち
 前借りに來てる引け目で待せられ
 前借りをまた前借りでうめ合わせ

芳子 止水 祥月 礎山 あいき

手切れ金のつもり前借りあつかまし
 前借りの生保で自分の墓を立て
 前借りを競馬ですったとも言えず
 前借りへ大工大きな顔でくる
 前借りのデートに恋の花が咲く
 前借りもやつぱり自分の汗でうめ
 前借りをしてまでデートの見得を
 前借りも出来ずデートは歩くだけ
 前借りの出来ぬ男にあるかたさ
 前借りも予算に入れてマイホーム
 前借りをしてまで遊びにいく若さ
 アルバイトの前借りをと買うスキー
 前借りへ文句言うまい人不足
 前借の赤字が毎月つき回り

生々庵 大吉利 文秋 桃路 楨三 凡九郎 百酒 つき子 凡吉 千梢 奈良子 万笑 天笑 小松園



磨かれた伝統の味

司子集
鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
 東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
 売店・各百貨店のれん街

前借り の 金窓口 で 念おされ
 前借り で 産婆のお礼やと 済み
 前借り へ 嘘と見抜いた顔もせず
 マイホーム 退職金まで前借りし
 前借りも 職人氣質の内に入れ
 前借の 女へ愛児が 病む報らせ
 何はさておいて前借りすると決め
 前借りをしてでも今が買うチャンス
 前借の 二人が出合うバーの街
 前借りの ベテラン腕の立つ職人
 土曜日の 經理 前借りばかり来る
 休みなやと 前借渡される
 ささやかな前借りで孝行の真似を
 ほどほどにしとけと前借り叱られる
 十字架を胸に前借りする女
 前借へ 堕ちる鏡がにくくなる
 前借りの 分だけ残業の灯も暗く
 前借りと 話さず友の 温い金
 当然のように 前借り 悪びれず
 柳安子

兼題「駅前」

大坂形水選

駅前に 住んで 電車に 乗りおくれ
 駅前の アーチへ 不満な 全字連
 駅前を わがもの 顔に 栄転し
 故里の 訛へ 還った 駅の前
 駅前と 言うた 下宿は 路地の奥
 温泉の 駅前法被しつく付纏い
 駅前に あすの 運命を 変えるひと
 駅前の 交番 何か あつたらし
 駅前 は ますい ウドンも よくは やり
 駅前で 社旗は 照れくさそうに 上げ
 美代
 綾女
 小志
 与呂志
 新之助
 一三夫
 季賛
 扇水
 野迷路
 一三夫
 白柳
 多志
 水客
 庸佑
 夢成
 夢成
 百水
 一三
 柳安子

いさむ
 綾女
 小志
 与呂志
 新之助
 一三夫
 季賛
 扇水
 野迷路
 一三夫
 白柳
 多志
 水客
 庸佑
 夢成
 夢成
 百水
 一三
 柳安子

駅前に 住んで 時計になる 初発
 駅前の のれん 穴場を たずねられ
 駅前 で 少年時代 の名で 呼ばれ
 駅前 と言え 資産を 値踏みされ
 駅前 で うまい コーヒに 行きあたり
 乗りつぎの間を 駅前の サウナバス
 表玄関 という 駅前の にぎやかさ
 駅前の 灯に 人生を ためされる
 駅前 で 別れ 待合で すぐに 逢い
 駅前 だけ ちよつ 鋪道とアーケード
 張りボテ のように 駅前の 新興地
 駅前の 空地で ラーメン屋が 儲け
 駅前 で 小成り になった 母迎え
 宮様のお成り 駅前 美化される
 駅前 で 先ず 一声を ぶち始め
 終電で まだ 駅前の おぶ 漬屋
 駅前の ポスト デートの 人が まち
 汽車待ちの 駅前 通り 短かすぎ
 駅前 で キリンと アサヒに らみ合い
 酔うたの と 噴水 駅前 夜が 更ける
 駅前 に 伊勢は ささえの 焼く匂い
 笛流れる 駅前 露地で 子の 決闘
 駅前の 旅館は わざと 通り過ぎ
 陸橋が 出来て 駅前 遠くなり
 駅裏に 住んで 駅前 まで 遠い
 駅前 と言う 気易さが 乗り遅れ
 かけ軸も 駅前 旅館の よすこれよう
 待つ歌が あって 駅前 広ろすぎる
 反戦 歌流れ 駅前 騒がしい
 花梢
 葵水
 一三夫
 新之助
 静馬
 小路
 庸佑
 水客
 天笑
 万的
 百水
 河二
 肖産
 奈良子
 圭井堂
 小路
 季賛
 鬼遊
 静馬
 万的
 小松園
 夢成
 一三
 天笑
 虎城
 柳宏子
 好郎
 白柳
 形水

兼題「指圧」

八木摩太郎選

内職の 肩を いたわる 子の 指圧
 昭和 元禄 指圧師 テレビに 登場する
 ヒロインも 指圧して いる 舞台裏
 あんさんも 指圧で つかと 連れになり
 指圧 でも しなければ 医者にも 見放され
 かくしゃく と 灸も 指圧にも 知らぬ 祖父
 やわ肌へ 容赦 ぐめんの ない 指圧
 指圧 教室 水着の 助手に 気を取られ
 針やいと 指圧 病氣になやむ 日
 同病 相憐み 指圧 すすめるに 来
 手芸より 指圧 習えと 無理を 言い
 あんまり 違うと 指圧 だめを 押し
 灸の 跡よけて 指圧 指無口なり
 医業 不信 待合室は 指圧 論
 ポイントを おぼえ 指圧に 母を 探み
 指圧 師が パパの 夜勤を とくほぐし
 結局は 指圧が きいたか 痛みとれ
 指圧 やで 昔なじみの 妓と 出合い
 見離され 縄の 心で 指圧 する
 先生と 言われ 指圧の 良く 流行り
 こそばゆい 孫の 指圧を うれしがり
 色街の 蔭に 指圧で 食い つなぎ
 けんびきに 指圧の ツボが 心地よし
 こそばゆいと まで 指圧 押して 呉れ
 指圧 した方 お先きに 逝てしま
 指圧 屋の 口八丁が 気に入ら ず
 指圧 師に 浮気 封じの ツボも 聞き
 看病 へ僕も もし しゃの 指で 押し
 指圧 まで ブーム になつて 本が 売れ
 指圧 師が 最後に 一つ 平手 打
 お医者 ごとく 指圧の 心は 母ごころ
 章雅
 虎城
 扇水
 古方
 滋雀
 静馬
 凡九郎
 あいき
 日満
 一三
 小松園
 葛城
 多志
 凡吉
 千梢
 庸佑
 好郎
 トメ子
 花梢
 静馬
 滋雀
 金三
 葛城
 静歩
 天笑
 天笑
 富久
 文秋
 維久子
 一三夫

大阪文化祭第21回川柳大会

日 時 昭和44年11月16日 (日)
11時開場・午後0時半開会
会 場 毎日新聞大阪本社講堂

賞

兼 講 題 演
宛 締 投 席
先 切 句 題

「おんな」 伊前田 勇氏
「ブーム」 金 泉 静 選
「コンピューター」 中 島 生々庵 選
「団地」 堀 口 塊 人 選
「開通」 堀 口 塊 人 選
(当日2題発表)
各題ごとにハガキに2句
住所・郵番・氏名・雅号明記
11月1日着限
〒530 北区中之島一
大阪市教育委員会内
大阪文化祭川柳大会係

兼・席題の優秀句

主催 大阪府・大阪市・府教委・市教委

お 買 物 は
4 都 を 結 ぶ
大 丸 へ !



あんまとは違うと指圧むくれ出し
ほろ酔いで呼んだ指圧で寝てしま
指圧師が神経痛でなやまされ
勝負するように指圧の腕まき
指圧療法へんだところへ指がくる
冗談も言うて指圧のツボたしか
新薬をばるくそに言う指圧
指圧師はつばを圧えて受答え
かゆいところ出来て指圧に無理を言
ノイローゼの壺はと指圧首を押し
兼題「ルール」 正本水客選
小ざかしい奴すすれのルールゆく 芳子
人間が宇宙へルールの線を引き 正朗
ルールに縛られ背延びを忘れてた つき子

世を捨てて見るとルールにある広さ
ひとりだけルールを主張して除名
自問自答してルール消している
交差点ルール示して子が渡り
国鉄のルールを守る変なスト
ルール無視するも若さのエネルギー
ルールどおと行きまへんワテ等人間
人生のルールに今日を改める
気の弱い者だけルール守つとり
酔つてもルール守つてすべり込み
負けそうになってルールにけちを
ままとにルールがあつてママ交代
ルール一本ぬけた盲点覗かまれし
ルールなど気にせぬ人がかきまわし
ルール無情土灼け決勝再試合

夢 成
富久一
静 歩
つき子
酔 々
柳宏子
凡九郎
好 郎
圭井堂
貞 山
小松園
桃 路
生々庵
小松園
章 雅

これ以上曲げぬルールで妥協する
解釈を自分本位にしてルール
はち切れる若さがルールまもらせず
仲人へルール違反のデイトする
新婚のルール銀婚まで続き
ルールだけ知つて多趣味をほのめ
ルールあるようにやんまが輪と松書
咲けば散る花のルールの淋しくて
大めめあとでルールをたしかめる
人生のルール妻子を守らねば
国会のルールに牛歩もいねむりも
一人ずつ聞けばルールは知っている
こんな玉ころがすだけにあるルール
ルール通り歩いて世間に遠ざかる

好 留 子
頂 留 子
白 柳
夢 成
柳 路
あ い き
一 舟
桃 路
小 路
禎 三
与 呂 志
千 柳
白 柳
水 客

安芸路を行く

Ⅱ近県川柳大会に出席Ⅱ

高杉 鬼遊

九月六日、うす曇の朝であった。大阪駅から特急かにもに乗った総勢十三名、白柳、好郎、小松園、摩太郎、薫風、天笑、鬼遊の男子軍に、花梢、千万子、美代、茂美、葉子、弥生という女性軍である。列車内で早速、席題を出され一同うんざり。

十三時広島着、広島川柳会の石原伯峰氏の出迎えをうけ、平和公園へ赴く。入口正面の噴水が燃え上ったり、沈んだり、種々に変化して飽かさな、夜になると五彩のネオンに輝いて一層の美しさを奏でる由。原爆ドームを仰ぐと夏の陽が暑い。平和資料館に入る、好むと好まざるに関わらず巻込まれた戦禍の悲惨さが蘇えり胸が痛んだ。

小雨の広島駅から呉線に乘車、広島から形水氏が乗り合わせ、忠海へ向う、途中鬼焼氏も合流する。

忠海駅から港までの連絡時間がないので、渡船場へ向って徒歩競走となる、広島で買った土産物が重い。港へ来た時は既に遅く連絡船はゆるやかに方向転換中であった。次便までの一小時、海岸べりに腰を下したり、釣りを楽しんだり、淳朴な風土に合わせて一同ボン

ヤリと時を過す。車と一緒にフェリーに乗船、船の上で自動車事故も起り得ることを発見する。十五分で大久野島に着く。大久野島国民休暇村宿舎と役所らしい名称だが別名くのしま荘と呼ぶ。鉄筋三階建の立派なのに驚く。紳士と淑女は別棟の二階三階に分けられ残念。入浴も終り、浴衣姿で一同食堂に集る。新鮮なハマチの造りはさすがに島の味を満喫させてくれる。花梢さんご持参の味付のりと塩昆布の売行き良好。夕食後、島の夜景へ歩を運ぶ、芝生へ寝転ぶと暗い空から星が囁く。

朝食中、天笑氏の料理教室「卵をわるコツ」の指導があつて、笑いの内に大食する。昨日のフェリーと違い小さい癖に、一等船室のある客船に乗る。船上は我ら川柳人のみ頻りにシャッターの音がする。和服の似合う葉子さん、若い弥生さんが狙われるのも無理のないこと。傘で持参の好郎氏に天は恵みの雨を降らせる。

港には、たけはら川柳会長の山内静水氏が卒先自動車部隊を引きつれわざと出迎えて下さる。雨に煙る瀬戸の海を左に眺め一路車は会場へ疾駆する。

受付に並んだおっぱの女子学生に、ふと学芸会と錯覚する。新築間もない会場は演壇に向って一千名の客席が傾斜している。

川柳塔の一行は中央右寄りに着席する。東は奈良から、西は下関より集った柳人一六〇名、投句八〇余を数える。おっぱはセーラ服の司会は淀みなく淡々と

して清潔だ。たけはら川柳会がもつ若竹の清纯、そう言えば壇上の脇取りに並ぶ四名の男女も皆二十才代、獅子がわが仔を谷へ突き落とす親の慈愛に満ちた静水氏のご指導の程がうかがわれる。

黒く陽焼けた山内静水氏が今日の広い会場を狭くするよう大会のムードを高めてほしいと、五体に充満したフアイトを押えつつ挨拶する。

もの馴れた態度で川村好郎氏の柳話が始まる。柳人よ精神的に若くあれと自分に言い聞かせるように具象的な日常の話題から、聴衆の耳目を集める語り口が魅力である。

静水氏選席題「フアイト」を最後に大会は無事終了する。

蛍の光がスピーカーから流れ、静水氏初めたけはら川柳会の大勢に見送られ、大阪柳人を乗せた列車は想い出の竹原駅を後にする。

川柳塔社常任理事会

九月四日六時から二賞決定をかねて理事会が開かれた。二賞ともに難航したが恵二朗氏と紫さんに落ちついた。

出席・白柳・好郎・水客・古方・形水・薫風・葉・多久志・小松園・文秋・生々庵・三夫諸氏

★柳界短信

▼布部幸男の霊を慰める会が、九月二十八日午後一時から、京都松尾大社境内亀甲茶屋で開かれた。宿題「寄席」「原稿」は故人をしのぶにふさわしい。



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

玉造川柳会 西出一栄報

ドキンとさせて踏切の鐘が鳴り 白 柳
物価高ますます主婦の目があるし 一 栄
信玄袋出て来て祖母の長話 綾 太
袋から金魚は光る街を見る 恭 久
市場乱立にここに許りして居れず 頂 留
ライバルがここにミスを調べに来 一 舟
もみ手してお得意さんへ撒く笑顔 井 平
どん底を見せずにここに出す学資 富 久
人前をそっと外したひざ枕 竹 青
そっとしておこうよ恋の傷だの愛 六 龍
小遣いをそっとしのばす義母の愛 宇 宙
嫁の目をそっと盗んで甘やかす 滋 雀
そっと目をつむり唇待つ動悸 章 雅
裏口はそっと開きます母の愛 恒 明
傷心の遺族へ世間うるさすぎ 眉 水
そっと手を入れた乳房がなつかしい 柳 宏
女房が助手棚卸はかどらう 虎 城
助手席に居て運転に肝ひやし 葵 二
助手だけに恩師の苦勞を身に感じ 誓 水
助手席へ女房を乗せた共稼ぎ 風 仙
洞

南大阪川柳会 金井文秋報

新たなる決意にもえたタバコの火 柳 宏
心から友達歩巾合してくれて 小 松
薄情にされてふんぎり楽につき 一 舟
ナフタリンかびと戦い瘦せて行き 文 秋
追憶のよすががアルバム色あせて 肖 二
退院の心新たな土を踏む 滋 雀
老友と長生きしようぜとお灸 智 子
もう帰る帰ると女座り変え 柳 志
ふんぎりのつかぬ辞表をもち歩き 恒 明
案の定会ってつかぬ友の地位 庸 佑
産ぶ声を聞いて新たな決意わく 葵 水
もう帰る頃へ欠伸をかみころし 儀 一
酔いどれが帰る近道忘れない 金 三
追憶の歴史が変る一頁 金 三
年賀状暑中見舞でつなぐ友 古 方
一日だけ帰った帰ったいてくれ 古 方
電算機でたくんぎりつけてくれ 千 梢
帰れとは云えずノレンをたたみかけ 吸 江
がらくたをふんぎりつかぬまに溜め 君 子

備前川柳社句会

目賀芳月報

踏んぎりを迷わせている義理と金 鶴 声
家に帰るのが邪魔くさい程に酔い 白 柳
ふんぎりが着けば別れて居たもの 綾 女
ありし日の妻の仕ぐさがよみがえり 双 葉
今日も無事帰り感謝のキーを抜く 喜 風
誘われて飲み屋で友の愚痴を聞き 誓 二
帰るべき家とは非行の眼に見えず 凡 九
決意また新たな齢を意識せず 好 郎
裕福な友の涙を見てしまひ 千 代
追憶のどの頁にも酒があり 虎 城
あああれは友達ですと甲斐性なし 静 馬
焼夷弾イヤな追憶するやけど 眉 水
帰省して子供の頃のあだ名きく 千 万
追憶のページ開けば頬染まる 敏 子
真直ぐに帰れと中座の背の声 章 雅
昔日の恋アルバムの端に生き 鮫 虎
クラーを買って子供が風邪をひき 一 声
ためらっているのに自動ドアがあき 秋 月
おじいちゃんミスカーが好い 鈴 女
メモしたという安心で皆忘れ 鈴 女
大安の日は昔から親しまれ 鈴 女
正直に神が宿ったのも昔 芳 二
虫干しへ昔話しの色を吊り 千 翁
昔から母のきらさぬ置き薬 伊 久
霧囲気に溶けて昔の歌を出し 胡 風
昔なら姦通罪になるドラマ 幸 郎
おしゃべりが隣のおしゃべり出し 三 与
鉄びんの錆も昔の味を笑っ 三 与
ランドセル七夕さんの笛を持ち 水 仙
手を振って今日も別れたランドセル 象 雄

ランドセルあるから帰っているらしい
おとなりと同じでは駄目ランドセル
おしゃべりの背中の子供がそり返り
年寄りがぼつんと昔の事を言い
故郷の味は昔のまま甘し
ランドセルママの願いが背に重い
正知州
川柳たましま 水粉千翁報

一沫の不安恋する心から
不思議組み立てる積木をこわして
男の子違う姿勢で耐えている
まっすぐに父を指さす男の子
また起くるダルマ転がす男の子
順境の末路を母が不安がり
この家のゆとりを見せて床の花
逆らわぬ心波紋に揺れて耐え
揺れている愛あじさいに五月雨る
大詰が来て末席が揺れている
手を握る男同士に明日がある
貧灯を捧げて誓う母子家庭
薄給を心のゆとりでカバーする
ある奇蹟不思議に海が静かなり
快調にすべてが乗ってくる不思議
人の世の不思議を蜂と語るバラ
母親のゆとり見つけて膝に乗り
すばらしい不安日取りの秒を読み
靖国の母に男の子が居ない
酔うている真似が上手な男の子
節くれの手を信じよう目で誓い
三林坊
こまつ柳壇(小松市) 山上千太郎報
入合の鐘灯台も灯をともし 芳朗
過疎部落半鐘やぐらも傾いて 柳

永平寺鐘を合図に動き出し
鐘一つ首引つ込めたのど自慢
目の青い人も鐘つない法隆寺
給料前行く当てもない髭を刺し
腕相撲甘える女に気がくじけ
腕の効く職人無口で無愛想
注射器におじけついている太い腕
勞使共平行線の腕を組み
和歌山短詩型文学クラブ 垂井葵水報

鉄骨の夢を果して親は逝く
鉄骨聚落中で人間生きていく
鉄骨へペンペン草も歯が立たず
田園の哀愁鉄骨立ちはじめ
お隣りに負けられませんか鉄骨よ
材木屋鉄骨でっかといひ顔
愛想が消えず鉄骨止めにする
垂れ下る雲で鉄骨あたま打つ
鉄骨を手とし足とし大仏像
言い出せぬままに機会は流れけり
浪曲の流れを汲んで素人芸
琴の音の流れに痛み忘れたり
アベックのポート流れにまかせてる
雲の流れ見えていて別れ難くなる
今まで水を流してまた浮気
母だけは悪に流れてなお恋し
流される話と知らず信じこみ
口紅が少し気になる別れ際
口紅の濃い泣き言は聞いとれず
防犯灯の下で口紅確めると
唇の何か言いたい動きあり
唇の運勢程にもてはせず
魚山
信子
清香
さかえ
松水
弘美
迷流
千太郎

言い訳をする唇が泣いている
川柳大阪(大阪市) 児島与呂志報

例年のように乗り物が混むお盆前
行きざりの他国で知った深情け
欠陥車他国にまでもヒビを入れ
泪して他国へ嫁ぐ娘を送る
バーの娘は鉛の加減で酔いを知り
精動は強いMボタンをはめて出る
Mボタンちぎれ娘の前で落ち
過去は捨て他国で恋を果らせる
万博工事他国同士も意気がある
大賜杯受けて歓喜の汗となす
Mボタン外れてまっせと言えませず
盆前の荷物妻の里帰り
盆前で赤字のローカル線が混み
口説くのに汗一杯の純情さ
たくましい女四人の中の俺
お月見は一人見るよりあの人と
人類の夢を満たした左足
服装史金魚の服もデザインし
月見した二階も今はビルのかげ
丸い月今の二人の影移す
地上での矛盾を含み月へ発つ
デザインのない服着られぬ年になり
デザインでうまくかくした妊婦服
コンピュータ理想の相手を見付け出し
デザインで売れ行かかわるハイライト
母さんめスカート丈折り上げる
算盤でやってみてから納得し
七〇年型ゲバルト用のニューロック
春子
季賛
茶坊
我勝
六竜子
幸晴
凡々
秀峰
喜醉
三十四
本蔭樺
一乃字
笑風
正則
鉄舟
与呂志
大林
上林
芳村
智内
宮也
元二
亜成
重則
洋児
一坊
健一
有坊
神田

若者に媚びるデザイン氾濫す
逆立ちをして月旅行のレッスンさ
富柳会(富田林市) 阿部柳太報

白柳

形水

善栄

天笑

笑痴

紅月

つき子

吉太郎

美代

六竜子

花梢

静馬

久

素郎報

好郎

慶太

青香

百酒

ゆきを

素郎

史好

醉々

草笑

大春

鬼吉

孝遊

虎声

デモに出た数で団結はかられる

元就の古智を学んで手を握り
タクト振る指揮者は人の気をつかみ
団結には強くマダムには弱く
団結からやがて芽生えた恋でし
知性の団結へ附和雷同のそしり
歴然たる証拠にうつり香が消えず
愛失せた証拠女はそっぽ向く
七癖を承知のはずの重荷なり
添うまではかくした癖も出はじめる
理想の高さ一人去り二人去り
証拠などないふところ手たじろず
社長だけ団結してると信じてる
まるべに川柳会(大阪市) 川村好郎報

儀一

八郎

千歩

功雄

之保

比呂路

敏雄

喜風

小松園

白柳

好郎

節子

瓢太

茂児

立一

泉陸

信代

寿子

幸子

扇里

好郎

どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報

OKと気前の良さが金持たず

歩のままの人生最後まで成れず

金以外ならOKと釘さされ

仲人のすべてOKが気に入らず

突然に嫁ぐナースに夢終る

最後まで意地を通して明治逝く
故里の母OK待たず連れてくる
招かれてOKさされることとなり
人の道最後かざって逝きたいね
水入りの最後に惜しい勇み足
最後まで幹事やっぱり酔われない
忍従の最後は女強くなり
晩酌へ妻は最後と念を押し
万事OK足りないものは住む所
OKを交したデート雨に会い
OKで社会復帰の送別会
口喧嘩最後はほれてる方が折れ
万事OK銀行はかぶり振り
駒つなぎ

吐来

九鬼

いわ

春風

酔々

一治

河股

勝也

元房

青房

好郎

岸南柳報

大げさな身振りで見るコミンシャル

大げさに嬌声あげてミニ娘

父兄会ママ大げさに聞いて来る

大げさに云うて一座を煙に巻き

大げさな構え程には芸もなし

大げさに言えば言う程うそになり

大げさな仕草で人を煙に巻き

ひとし

「川柳塔賞を載いて」 王紫

本年度川柳塔賞授与との身に余る光栄

の報に接し、唯々感激と感謝で一ぱいで

す。一向に上達せず時には常識外れの句

もある私をじつと暖かく見守り続けて下

さった諸先生並びにいつも川柳会、むら

くも川柳会、その他の皆様の御指導をい

大げさに事故の話を目撃者
大げさな孫のゼスチャー目を細め
割引で聞く大げさな妻の口
初産へ大げさなばかり云う甘え
お見合を知らぬ着付がお気に入り
ジャズミンを匂わせ泣き言楽しそう
血を拭けば声はほどでないかすり傷
大げさになって土産のはずむこと

川柳塔松江支部句会

祥月報

山水のあるのに子等はコカコーラ
美を盗む画家に海あり山があり
パパママにかけて喜ぶ水鉄砲
ぱつとして露店が並ぶ雨あがり
発展をしたふるさとの水泳
画家になりきって名画に威圧され
百姓の慾は早りも水もほし
バラ句う行きずりの庭足をとめ
女らしさそろそろ句う娘は二十歳
水ぬるむ若い飛魚のダイビング
働いた手だ健康な汗句う
「只今」と母さんの匂いへ帰って来
外濠を埋めてくれるな水すまし
バラ句うバラの心のトゲを知り
妻句う日の夕暮れが美しい
形勢挽回びしゃりとひびく王手飛車
挽回挽回努力実ったまわり椅子
征服の山一杯の水の味
ウイロー社「風竹忌」(ハワイ)
風鈴の音色悲しき時もあり
ウイローの其の名も床し風竹忌
大関を倒し風呼ぶ土俵上

育園 弥栄子 柳信 南柳 小松園 摩太郎
睡蟬 可動 一実 鉄花人 舞吉 千代 泉甫 花子 雪美 軒太楼 白汀 晃男 杜樹 孤呂二 叮紅 通児 鶴丸 祥月
HH女 エス子 弦月

風風いので夕日に映える竹林
風邪一つ引かぬ我慢が早く過ぎ
椰子の風故郷は若葉のかおる頃
風もない日静かに竹の折れてけり
木枯もミニスカートによけて吹く
時代ずれ遺物となった風車
台風一過警報ついに間に合わず
ざりざりに生き風鈴にねぎらわれ
風なきに竹サラサラの音を聞く
風鈴の音も涼しきミニ娘
そよ風も病気の友に気をつかい
大風一過余生自信の目度が立ち
竹竿に身をまかせたる渡し舟
竹やぶへ戻って喋り合う雀
竹の穂の飽くまで寂か山の青
笹の葉を網代に組んで竹の雪
邦楽の文化へ竹の持つ誇り
高知川柳社 川竹松風報
いつ秘密明かそうチャンス待つ重さ
高笑いなんの秘密もない家庭
宴席の酒からもれる社の秘密
新人の秘密週刊誌のトップ
足音がして座布団へ敷く秘密
娘の秘密胸の鼓動がおさまらず
走っても追いかける夢で汗
濡るとはわかって走る俄雨
小走りに名所を巡るスケジュール
サイレンの現場に走る好奇心
氷屋の旗ちらちらと暑さ増し
緊張の心暑さを忘れさせ
じいさんに独占された五月場所
川口女 赤坊 峯円 快夢起 やなぎ 拝山 黙石 笑有 万里歩 河舟 節女 紅茶 泉水 一文字 蒼蛇楼 浮草 窓花 柳水 天花 一卷 雪枝 勝子 忠重 羅春 句念坊 百日紅 日向雨

岸和田市文化祭参加

岸和田川柳会二十周年記念
第二十回市民川柳大会

日時 昭和四十四年十月二十六日(日)
午後一時〜五時

会場 岸和田市民会館地下会議室

兼柳話 川柳塔社 清水白柳

兼題 大臣 岡橋宣介選

砂 夜明け 榎本聡夢選

土曜 川村好郎選

コーヒー 高橋操子選

後輩 内藤きさ子選

牙 外山瓢人選

席題 当日三題発表(各題三句)
吉村たけし選

呈賞 市長賞 文化協会賞 きしせん賞

各題秀句賞

締切 二時三十分

投句先 岸和田市宮本町二六三

596 吉村たけし宛

TEL 岸貝局六六三一

(投句のみの方は50円切手封入大会誌呈)

やせるかもしれない希望で我慢する
 念願の望みも絶えて雲流る
 敗北のうたを覚えてコップ酒
 恋人に犬もなつて恋実る
 口紅の目立たぬ程に人待ち
 梅雨入り梅雨が暦の通り降り
 絶対の自信仲々負けていず
 竹 莊

川柳たけはら(竹原市)

静水報

残念でたまらないのに笑顔見せ
 父さん寝てもにおいですくわ
 仲よしも試験となればライバルに
 急がしい父のかおはに苦が見えず
 風みどり刈るには惜しいレンゲ草
 おはようと朝の挨拶いい気持ち
 グランドは汗と涙のすて所
 背いくらべしていた母が小さくなり
 以上学生
 一球の真価風向きたしめる
 夫とゆく三十番の塚の春
 押し切つてなぜ正論は孤独なる
 スカートの長さ気にする一年生
 すみれ摘む手元狂わす蝶が舞い
 ブラウスが緑に染まるハイキング
 貞子

10月

句会

玉造川柳会(大阪市)
 十月十一日(土)
 午後六時

所 題
 記録・ホルダー・
 特別宿題・反対
 玉造交差点南一〇〇米
 大阪信用金庫

ハトポッポ見せにわざわざ町へ行き
 初節句そと孫エクボ見せに来る
 入学式ロボットのようについて行き
 仕事着で通えるところに職があり
 大のこと言うてもめてるのも夫婦
 子等の顔順に笑顔で追う米寿
 病人でなお真紅の花を咲かす人
 先輩に恵まれ春の陽はうらら
 切り花の命新聞紙に包み
 退院の日の眼帯を取るみどり
 海峡に小鳩の翼を流して恋が終った
 損得で生きてる人の味気なさ
 胸さわぎ音沙汰ない子の夢を見る
 ふじかけ短詩聴会
 藤本礎山報
 日曜の計画雨に流される
 日曜も組んで史趾を父と見る
 ネットレスかけた先生見た日曜
 いい親父日曜祭日家庭の日
 金のない日曜ねて見起きてみつ
 お休みのはずの日曜もう暮れる
 日曜日せめても母のお手つだい
 ねてる父なでてあげよう日曜日
 日曜は母の目覚し止めておく
 そのみ
 大 陸
 雅 鳳
 鬼 焼
 不動
 操 子
 延 子
 淨 美
 笑 子
 弘 人
 康 徳
 天石庵
 房 子
 万 里
 光 子
 勝 子
 佐知子
 喬 子
 惠 子
 美 代
 和 宏

堺・若芽合同句会

所 題
 頑固・もつれ・雲
 八木摩太郎宅

富柳会句会(富田林市)

所 題
 頑固・星・ひょうしめけ
 富田林公民館

以上小中学生
 珊瑚婚近き日曜稼ぎ溜め
 金のない日曜小川に糸を垂れ
 新家庭訪うをはばかる日曜日
 眼がとける程日曜を子等眠り
 日曜も祭日もなし商守る
 マイハウス日曜大工で五年かけ
 日曜は寝る気の子等が起しに来
 お人好し日曜たんび用が出来
 日曜がなおいそがしい母となり
 日曜を遊びつかれた子と早寝
 楽しさは日曜毎に孫が来る
 日曜も祭日もなし妻の日々
 城北朗朗句会
 川口弘生報
 初恋を知ってる人形を持って嫁き
 初恋に似た顔、バスを乗りすぎ
 初恋の話に古稀も少し照れ
 初恋の人今も二十才の顔であり
 初恋は老いても霞の中に見え
 逢うたのに初恋の人ふりむかず
 初恋のなやみへ優し姉が居り
 数々の再辞通りの君だった
 入試場父兄にかわる機動隊
 月賦屋を泣かし榮転してしま
 勝 久
 佳 女
 貴 恵
 和 久
 泰 嗣
 忠 志
 よしひろ
 征 也
 鎮 也
 葉 舟
 稔 山
 礎 山
 加 太
 多 幸
 弘 生
 三 四
 ムラエ
 進 万
 雅 子
 繁 津
 志 子
 風 洞

南大阪川柳会

所 題
 女神・体調・頑張る・
 大事
 松崎町二丁目以和貴荘

後藤梅志著

「秀句鑑賞と梅志句集」

送料共 五五〇円

作句力とその選句眼は、故麻生路郎先生から折り紙つきの後藤梅志氏が敢えて世に問う快著である。

序文に麻生霞乃女史、第二序文に梶元紋太氏、抜に清水白柳氏などが執筆されている。

秀句鑑賞には、あなたの佳句も登場しております。限定版につきお求めは早く。

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社

▼柳界短信▲

▼後藤梅志氏（大阪参事）は近く句集を出版されるが、その披露会を十月十八日午後一時から北区堂島大橋南詰、関電共済会館で開催される。

▼村上春巳氏（奈良同人）は姫路市飾磨区恵美酒七九六、光原荘内へ移られた。

転勤を機にやがては移転される由。

▼楠田英子さん（熊本同人）の住居番号が変更—熊本市京町本六番ノ十三号。

▼酒田清子さん（大阪同人）は路郎賞準優秀作の報に接し—注射よりより効きましたよ！便り—清子。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句） 中島 生々庵 選

近作柳樽（10句） 菊沢 小松園 選

課題吟（各題5句以内）

「パ パ」 水粉 千翁 選

「忘年会」 松下 たつみ 選

「顔 色」 山上 千太郎 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句） 中島 生々庵 選

近作柳樽（10句） 菊沢 小松園 選

課題吟（各題5句以内）

「かるた」 池田 あや子 選

「暖房」 西垣 錦風 選

「警察犬」 田垣 方大 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳装をご使用ください。

定価 百四十円（送料六円）

半年分 八百七十円（送料共 一年分 千六百八十円（送料負担）

昭和四十四年九月二十五日印刷
昭和四十四年十月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草

★路郎賞のほうはスナリ決定したが、川柳塔賞の選考委員には水客、古方、薫風という異色作家がいるだけに熱論火を吐く末にやつと決定したということをご報告する。

★さて、この二賞だが、各選考委員諸氏に、寸時も早く九月号を届けて、一時間でもゆっくり選句していたくつもりだったが、肝心の印刷所がボンコツ車の

ようにエンコの連続なので。

★おそくても八月三十日には発送できる予定が、九月一日だという。震災記念日ではないが荒れたボクは八つ当たりだった。というのは再校を持ってきてもロクロク目を通さずに責任校了という手段までとつたのに、この始末だから泣くにも泣けなかった。

★二賞にひびく雑詠だけは、それでも入念に再校して、あとで見つけた誤植は選考委員に連絡をしたが、他のページには誤植が多かったことと思う。執筆者諸氏は心からおわび申しあげます。富士野鞍馬先生からは「一字だけだから安心しろ」となぐさめていただきホッとした場合もあったが……。

★話はこの日のウッペンがつづくが、切手を貼って、出来ただけつ葉子さんと二人で、本社付近のポストへ投函に行くのである。好郎、白柳、薫風さんが封筒へ雑誌を入れてホッチキスでとめる、それを発送用のポロポロのフコ敷きに包

んで葉子さんと二人でカラのポストをシラミつぶしにさがしてはほりこむのである。スグいっぱいになるので心斎橋付近の人には迷惑もはなはだしい。

★これで最後のポストさがしという時は二人ともクタクタに疲れて、心斎橋筋を乞食のような格好で歩いた。「こんな格好、知った人に会うと恥しいですね」「なかにこの人出だ、誰に会っても気がつかないサ」ばくの場合、エリなしのシャツを胸はだけ、足元は婦人用のサンダルばかりという、釜崎スタイルだ。汗にぬれたシャツがよるよるで、ばく自身も、こんなイデタチの人間を心斎橋筋で見たことがない。

★いま若い人に流行の、このコジキスタイルを見た人があった。「不二田くんがアベックで心斎橋を歩くと、みな除けて通るね」とは秋田実先生である。えらい人に見つかったものであろう。ばくはまあいいとして、ミス川柳塔には気の毒をしたことである。

★九月十日、秋田先生に東

お買物は 明るく楽しい
ハンシンへ！



大阪新神
水曜定休

電話 361-1201 (代)



京へ連れていただいた。十一年前に東宝映画の砧まつりに招待されて行ったきりなので、まったくのお上りさんだった。しかし、これでも生まれは神田の生まれだが、最近是一年ひと昔という。大阪に住んでいても、一年たてば街の姿が変わってしまうのだ。いくら仕事がいそがしくても、たまには旅行をしないとダメだなア。

★東京には、新聞、放送、または川柳で結ばれている人たちがいる。それに親戚もあるが、どこへも顔を出さずに一泊で帰阪した。取材とは名ばかり、秋田先生が息抜きに連れて行ってくださったのだが、方向音痴のばくに、先生はひろし・順子という中堅級の漫才さんをつけてくださった。「ひかり号の座席につかるまで責任があります」という。付け人がついた旅行は生まれてはじめてだ。

★忙しいことはバツグンだが、なによりありがたいのは健康である。これからは夜がたのしい。夜と語れるのは秋だけである。
(不二田一三夫)

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に
多量服用



アリナミンA

海女と真珠のふるさと

近鉄特急で 伊勢志摩へ

磯の香りもさわやかな 海辺には海女の白い磯着がまぶしく 遠く白亜の灯台が印象的 内海には真珠いかだが浮かび 島影をぬう遊覧船も美しい 鳥羽湾を快走する時速100キロのホーパークラフトも人気のマツです

伊勢志摩の玄関宇治山田駅へ…
大阪上本町から1時間53分 特急券とも片道750円 京都から2時間23分 特急券とも片道870円 宇治山田駅から定期観光バスが伊勢志摩の見どころを便利に結んでいます



◆近鉄特急券のお求めは近畿日本ツーリスト・日本交通公社・日本旅行の各営業所

近鉄

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬策** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー